

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議(第 65 回)

日時：令和 7 年 4 月 24 日（木）14:00～16:00

場所：名古屋能楽堂 会議室

会 議 次 第

1 開会

2 あいさつ

3 報告

- (1) 令和 6 年度全体会議及び部会での検討内容について <資料 1>
- (2) 二之丸庭園第 1 2 次発掘調査成果について <資料 2>

4 議事

- (1) 二之丸庭園の修復整備について <資料 3>
- (2) 令和 7 年度事業予定について <資料 4>

5 その他

6 閉会

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議（第 65 回） 出席者名簿

■ 構成員

（敬称略）

氏 名	所 属	備考
瀬口 哲夫	名古屋市立大学名誉教授	座長
丸山 宏	名城大学名誉教授	副座長
小濱 芳朗	名古屋市立大学名誉教授	
三浦 正幸	広島大学名誉教授	
藤井 譲治	京都大学名誉教授	

■ オブザーバー

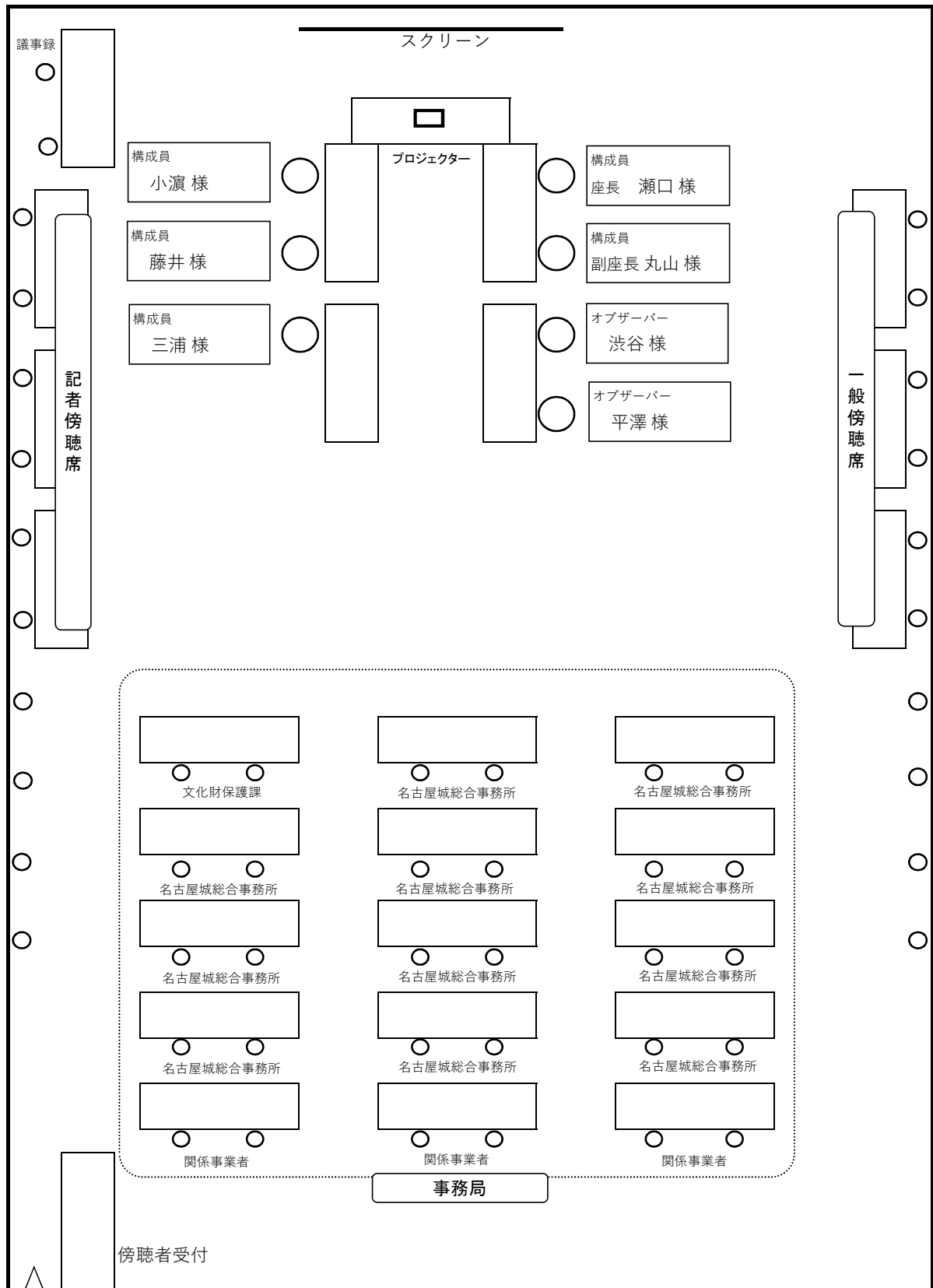
（敬称略）

氏 名	所 属
渋谷 啓一	文化庁文化財第二課 主任文化財調査官
平澤 毅	文化庁文化財第二課 主任文化財調査官

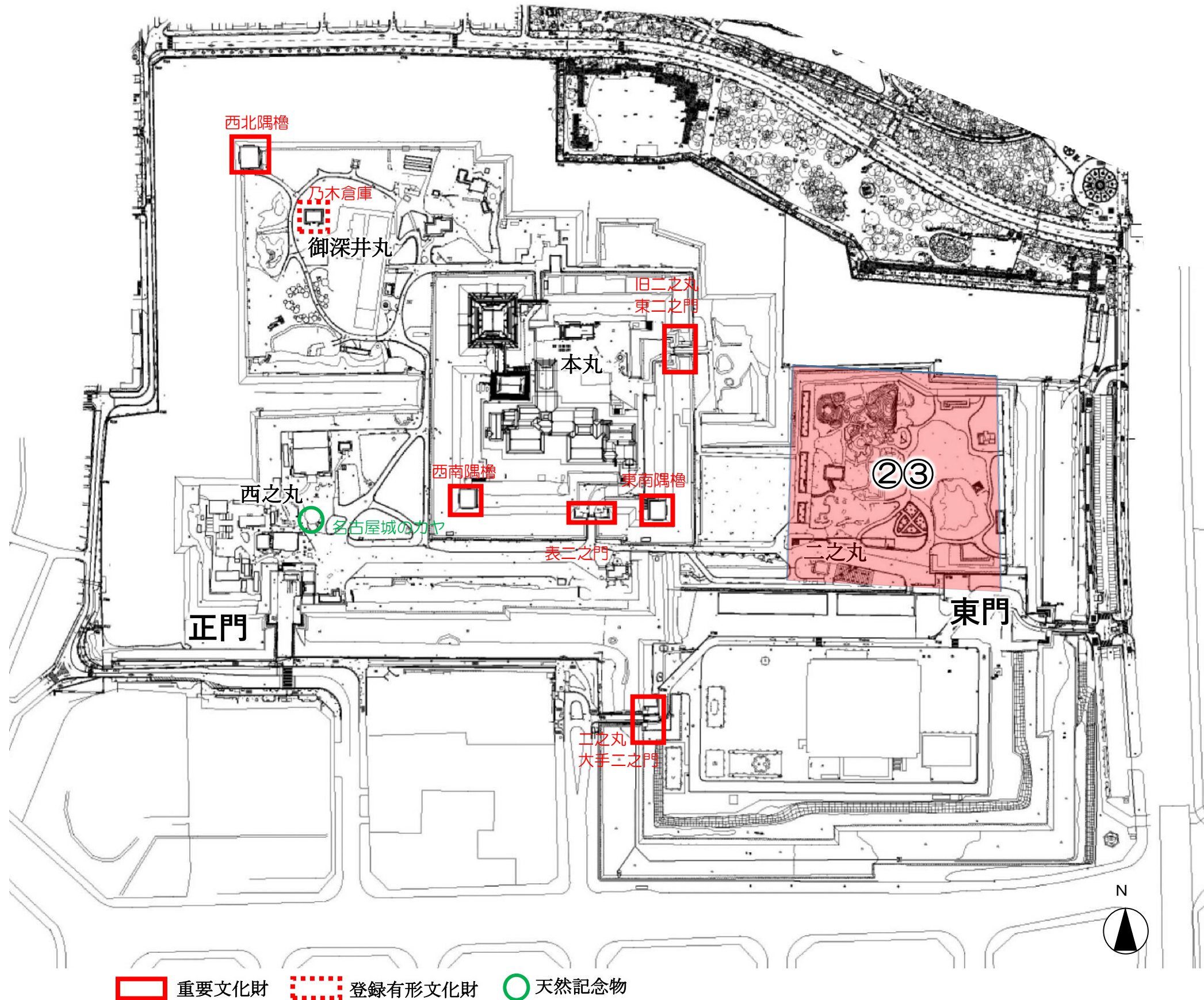
第65回特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議

座 席 表

名古屋能楽堂 会議室



第 65 回全体整備検討会議 議題位置図



報告

- ② 二之丸庭園第1 2次発掘調査成果について
「北池東部における発掘調査の成果」

議事

- ③ 二之丸庭園の修復整備について
「余芳周辺の石橋、燈籠、植栽等の整備」

令和 6 年度（2024 年度） 全体会議及び部会での検討内容について

1 全体会議の開催結果

開催日	議事	主な検討内容	部会での検討状況			
			建造物	庭園	石垣埋文	天守閣
第60回 令和6年6月10日	①令和6年度事業予定について <u>②植栽管理計画について</u>	①令和 6 年度の各事業の検討内容 ②植栽管理計画の説明				
第61回 令和6年8月7日	<u>①天守台及び周辺石垣の保存対策について</u> <u>②二之丸庭園の発掘調査について</u> <u>③重要文化財建造物等保存活用計画について</u> <u>④水堀の活用（舟運）について</u>	①石垣保存対策の具体的な手法 ②二之丸庭園整備のための発掘調査 ③西北隅櫓付近のボーリング調査 ④船着場の整備方針案				
第62回 令和6年10月11日	<u>①水堀の活用（舟運）について</u> （船着場の設計） <u>②植栽管理計画について</u> <u>③二之丸庭園の発掘調査について</u> <u>④重要文化財建造物等保存活用計画について</u> （西北隅櫓におけるボーリング調査） <u>⑤園内サイン改修について</u> ⑥名古屋城外堀周辺の園路等の改修について	①船着場の設計 ②計画（案）の修正 ③二之丸庭園整備のための発掘調査 ④西北隅櫓におけるボーリング調査 ⑤看板サイン整備の基本的な考え方 ⑥園路の改修及び柵の整備	④9/18	③9/2	④9/17	
第63回 令和6年12月13日	<u>①園内サイン改修について</u> <u>②園路改修計画について</u> <u>③天守台及び周辺石垣の保存対策について</u> <u>④水堀の活用（舟運）について</u> （船着場の設計） ⑤名古屋城外堀周辺の園路等の改修について	①サイン改修の基本的な考え方 ②園路改修設計 ③鶯の首（小天守西）の水堀側石垣付近のボーリング調査 ④船着場の設計 ⑤園路の改修及び柵の整備			③11/19 ④11/19	
第64回 令和7年3月21日	<u>①水堀の活用（舟運）について</u> （船着場の設計） <u>②二之丸庭園の修復整備について</u>	①船着場の設計 ②余芳周辺の石橋、燈籠、植栽等の整備		②5/10 9/2 1/28		

※下線がある事項：令和 7 年度以降も引き続き検討を進める事項

2 各部会の開催結果

部会名	開催日	議事
石垣・埋蔵文化財部会	第60回 令和6年5月31日	①本丸搦手馬出周辺石垣の修復について ②特別史跡名古屋城跡内の石垣保存方針策定について
	第61回 令和6年8月5日	①本丸搦手馬出周辺石垣の修復について ②特別史跡名古屋城跡内の石垣保存方針策定について
	第62回 令和6年9月17日	①本丸搦手馬出周辺石垣の修復について ②重要文化財建造物等保存活用計画について（西北隅櫓におけるボーリング調査）
	第63回 令和6年11月19日	①水堀の活用（舟運）について ②本丸搦手馬出周辺石垣の修復について ③天守台及び周辺石垣の保存対策について ④特別史跡名古屋城内の石垣保存方針策定について
	第64回 令和7年2月3日	①表二の門雁木復元検討について ②天守台及び周辺石垣の保存対策について
	第 65 回 令和 7 年 3 月 19 日	①特別史跡名古屋城跡内の石垣保存方針策定について ②天守台及び周辺石垣の保存対策について
建造物部会	第 35 回 令和 6 年 9 月 18 日	①重要文化財建造物等保存活用計画について（計画の概要・保存管理計画） ②重要文化財建造物等保存活用計画について（西北隅櫓におけるボーリング調査）
	第 36 回 令和 7 年 1 月 31 日	①重要文化財建造物等保存活用計画について（環境保全 計画） ②表二の門雁木復元検討 について
庭園部会	第 37 回 令和 6 年 5 月 10 日	①州浜状遺構について ②二之丸庭園の修復整備について
	第 38 回 令和 6 年 9 月 2 日	①二之丸庭園の発掘調査について ②二之丸庭園の修復整備について
	第 39 回 令和 7 年 1 月 28 日	①二之丸庭園の修復整備について
天守閣部会	（開催無し）	（開催無し）

二之丸庭園第12次発掘調査成果について

1. 調査区設定の主な目的

名勝名古屋城二之丸庭園の修復整備に伴い、現在進行中の北池修理にて必要な情報を取得するため。

2. 調査区について(図2)

(1) 調査区 1

面積：15㎡

目的：礫敷下に位置するタタキにあけられた穴(以下、タタキ坑)(飛石抜き取り痕か?)の確認、礫敷構築時期の確認

調査結果：礫敷は約3×2mの規模で広がる遺構で、含まれていた遺物(レンガ、ガラスなどの近代遺物)の存在から近代に構築された遺構であることが明らかになった。二之丸においてレンガを使用した大規模な建物は明治7年(1874)ごろであるため、明治7年以降に構築され、兵舎構築による造成で埋没(『陸軍大日記』の記述から明治15年(1882)ごろ)したと考えられる。

SX1は約2×0.3mの長方形の構造物である。壁面と底部はタタキで施工されている。内部は黄褐色粘土、黒褐色粘質土、礫敷由来の暗褐色粘質土及び礫の順に堆積していた。礫敷由来の暗褐色粘質土及び礫以外は全体に広がらず、部分的に堆積してい

た。池側(南側)壁面南西角と権現山側(北側)壁面北西角に切れ込みが確認できた。底部及び壁面をタタキで構築していることから水槽のような機能が想定できる。北側のタタキ面構築時にSX1も構築され、礫敷構築以前に廃絶したと考えられる。

SK(土坑)2は直径約0.5m、SK3は直径約0.3mの円形のタタキ坑である。底部はSX1とは異なりタタキ面のベースとなる盛土である。形状から飛石の抜き取り痕と考えられる。周囲のタタキに打ち割られた形跡が確認できないため、タタキ坑は施工時の形状を保っていると考えられる。タタキ坑の堆積土及び礫は礫敷に由来するため、礫敷構築以前に飛石を取り外し廃絶していた。

タタキ面aは約2×2mの規模で検出したタタキ面である。検出高は標高11.33mである(現タタキ面は標高11.77～12.30m)。厚さは1～15cmで南端で現北池に掘り込まれている。タタキ面aは現在地表に露出しているタタキの下層から検出しているため、古い構築である。また、現在地表に露出しているタタキと比較し薄く、脆い。表面に凹凸が目立つ為、上面は削平されている可能性がある。

(2) 調査区2

面積：8.5㎡

目的：敷石A(橋台)の時期比定、橋(礎石)の時期比定、池底タタキ下の土の堆積状況の確認

調査結果：敷石Bは現在地表に露出している敷石Aの下から確認した。敷石Aと同様に上面が平坦で、水平に据えられている。敷石B上に置かれている礫やタタキは敷石A設置の際に角度を調整するためのものと考えられる。

タタキ面bは敷石Bと同じレベルで確認した。調査区1タタキ面aと比較すると硬質で、色調は褐色で現北池の護岸及び池底タタキに類似している。敷石Bと同様に上面に礫が置かれており、敷石A設置の際に角度を調整するためのものと考えられる。タタキ面bと敷石Bは同じ覆土が堆積しているため、同時期に廃絶したと考えられ、その後敷石Aが施工された。タタキ面bと敷石Bのベースとなる土は確認できていないがレベルから両遺構は同時期に機能していたと考えられる。

SK4は直径約1.5mのタタキ坑である。深さは約50cmで内部は土が堆積している。壁面から池底タタキのベースとなる盛土(7層)を確認することができた。SK2やSK3と比較すると輪郭に角があり、形状もいびつであるため、池底施工後に打ち割られた可能性がある。SK4内に石A～Cが位置している。堆積状況から石A及び石BはSK4構築後に入れられたと考えられるが、石Cの設置時期は明らかにできなかった。

SK4の周囲には4石の礎石が確認できる。礎石の底面は池底タタキ底よりも下に位置しており、7層上に据えられている。礎石、池底タタキ、SK4の順に構築された。

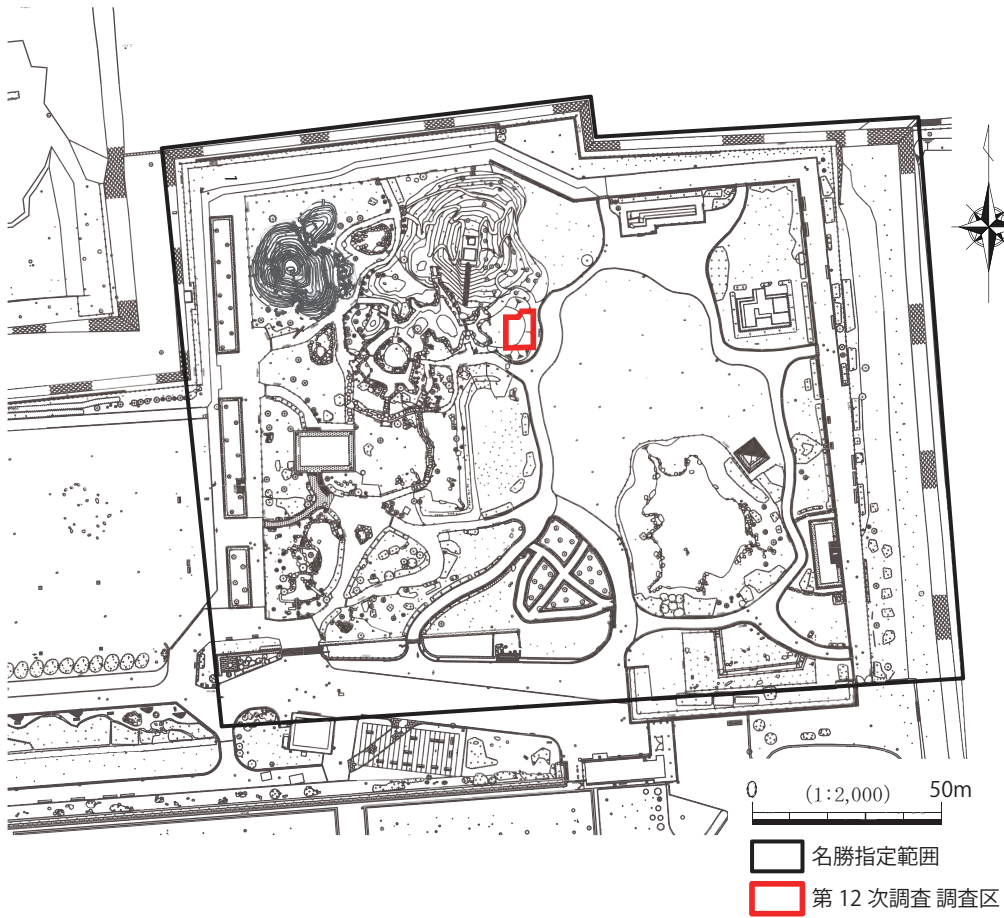


図1 名勝名古屋城二之丸庭園 発掘調査位置図

SK2(西から) 赤線は飛石据付け想定面



SK3(西から) 赤線は飛石据付け想定面



礫敷(西から)



SX1(南から)



タタキ面 b(南から) ※赤枠

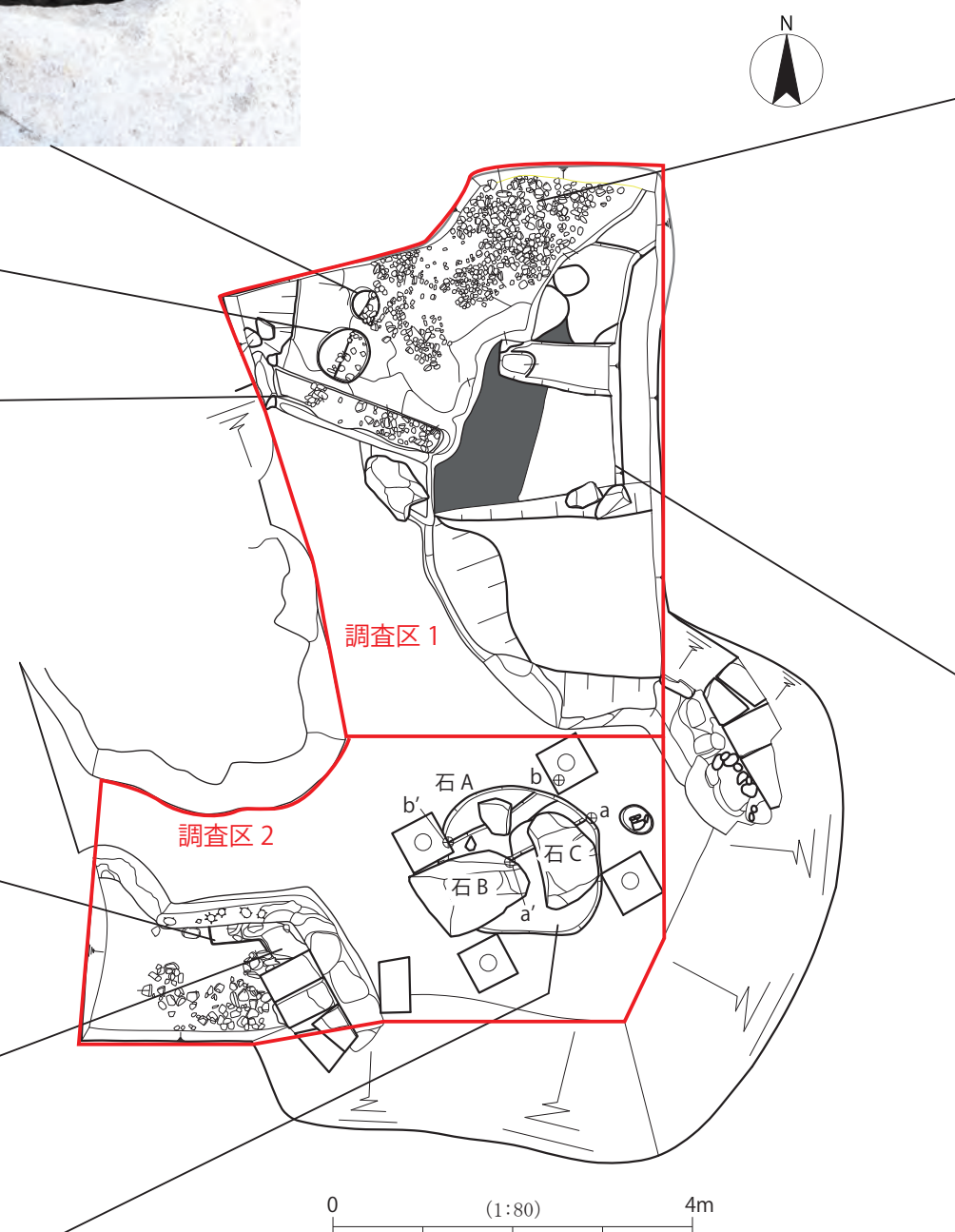


敷石 B(西から) ※赤枠



敷石 A

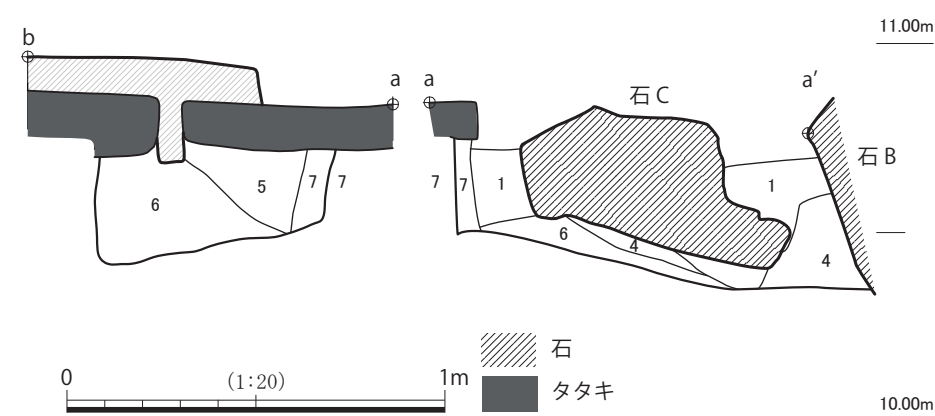
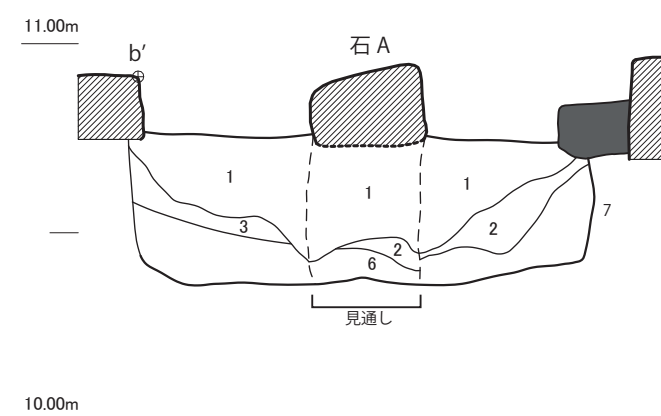
SK4(北から)



タタキ面 a(北から) ※赤枠



- 1 にぶい黄褐色粘質土 レンガ片含む 近代以降の堆積
- 2 灰褐色粘質土
- 3 暗褐色粘質土
- 4 暗褐色粘質土 石B設置以前の堆積
- 5 黒褐色粘質土
- 6 にぶい黄褐色粘質土
- 7 にぶい黄褐色粘質土 地山由来のブロック土含む SK4構築以前の堆積



二之丸庭園の修復整備について

1 余芳周辺の整備

修復整備は、北御庭については『御城御庭絵図』の空間性を回復することを基本とするが、同時代に描かれた『尾二ノ丸御庭之図』は、『御城御庭絵図』と異なる箇所が見られるため、2つの絵図を比較検証した。『尾二ノ丸御庭之図』と『桜御間南御庭四季之図』には、植栽名が記載されており、樹木選定に際し史料として取り扱う。また、余芳と思われる第14代藩主慶勝によって撮影された古写真についても史料として取り扱う。

(1) 古絵図

ア 御城御庭絵図／作成年代：文政年間（名古屋市蓬左文庫所蔵）（図1-1）

第10代藩主斉朝により改修された二之丸庭園を詳細に描いた絵図で、文政年間に作成されたと考えられる。

イ 尾二ノ丸御庭之図／作成年代：文政以降（徳川美術館所蔵）（図1-2）

文政期の庭園を描いた詳細な絵図であり、二度の大きな修正が認められる。

ウ 桜御間南御庭四季之図／作成年代：文政以降（名古屋市蓬左文庫所蔵）（図1-3）

二之丸御殿の桜之御間南御庭を描いた絵図であり、植栽については樹種や尺寸が記されている。

(2) 古写真

ア 第14代藩主慶勝によって撮影された写真。余芳に関する写真は1枚確認されている。

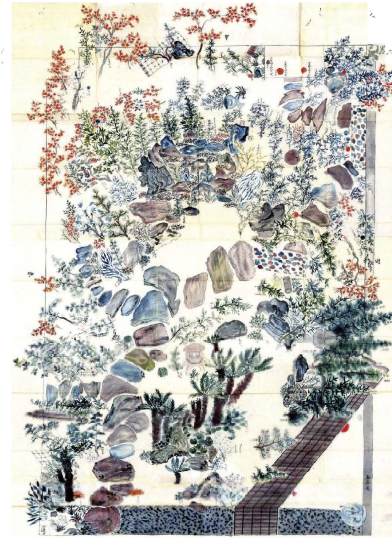


図1-3 『桜御間南御庭四季之図』
(名古屋市蓬左文庫所蔵)

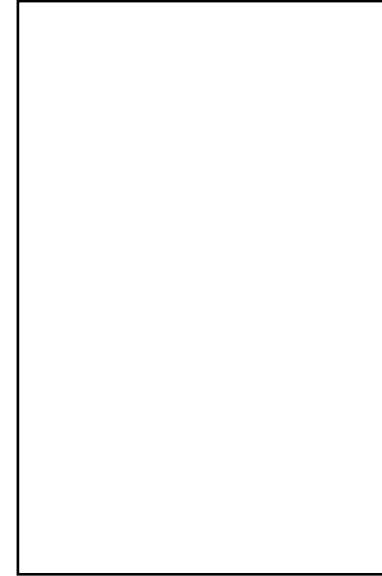


写真 1-1 二之丸御庭の御茶屋
(徳川林政史研究所所蔵)



図 1-1 『御城御庭絵図』
(名古屋市蓬左文庫所蔵)



图 1-2 『尾二ノ丸御庭之図』
(徳川美術館所蔵)

2 構造物

(1) 石橋の構造検討

- ・石橋は、庭園部会にて、現地で実寸模型にて大きさと配置を検討し、『御城御庭絵図』と同様に2本を南北にずらして設置することとした。
- ・橋長は、沢飛石1に接し、南側タタキ護岸にかかるようL=2.6mとする。
- ・幅は、沢飛石2に架かるよう、50cm程度とする。
- ・厚みは、沢飛石1との高低差を考慮し、つまづきにくい段差とし、かつ十分な耐荷重を見込み、厚さ18cmとし、側面は周辺の風景を考慮して断面図のとおり15cmとした。
- ・石材は、新材とする。
- ・配置は、絵図のとおり北側は2本とも沢飛石ー2に、南側はタタキ護岸に架ける。
- ・天端はノミ切り仕上げで2分程度ムクリ仕上げとし、側面は天端より150mmはノミ切り仕上げ、底面は荒はつり仕上げとする。沢飛石2南側タタキ護岸に架かる箇所は、欠き込み仕上とする。



図 2-1 石橋『御城御庭絵図』部分
(名古屋市蓬左文庫所蔵)



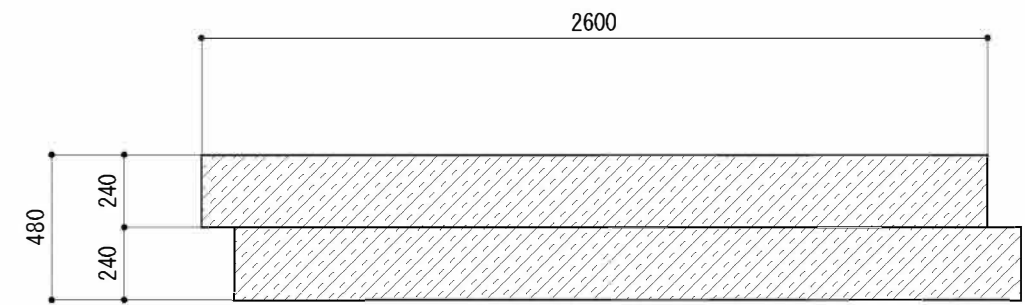
図 2-2 石橋『尾二ノ丸御庭之図』部分
(徳川美術館所蔵)



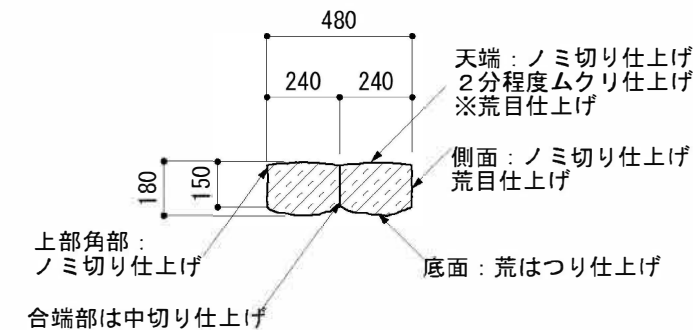
写真2-1 発掘調査後写真(上空より)
(赤点線：計画線加筆)



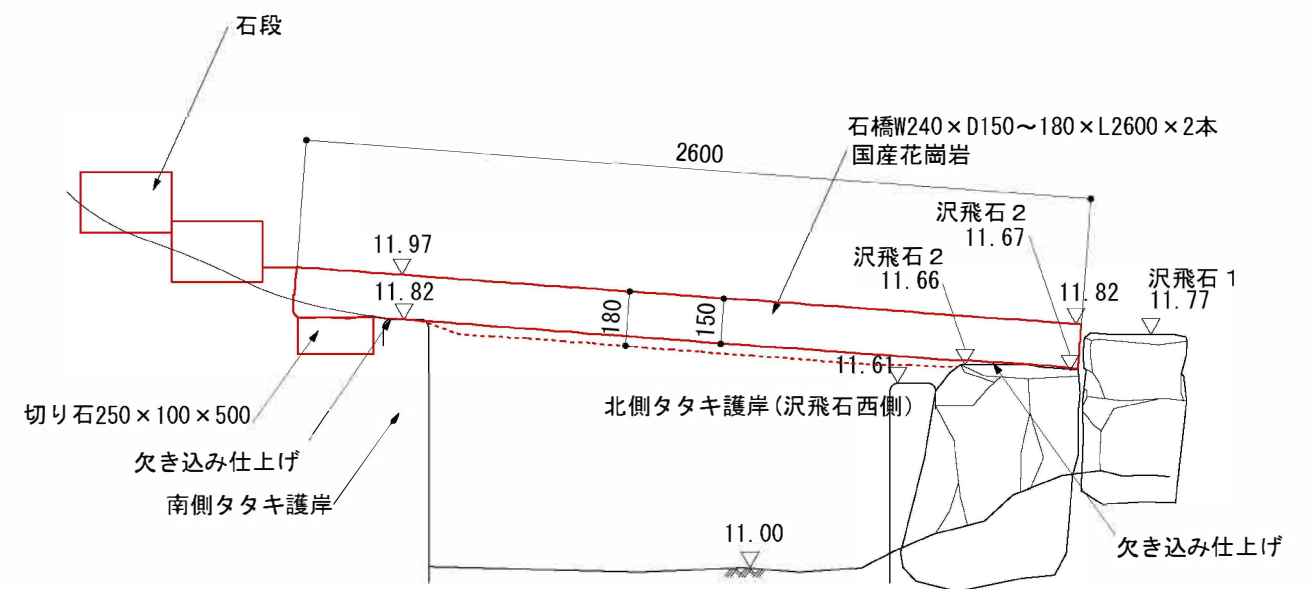
写真2-2 実寸模型設置状況(上空より)



石橋平面図 S=1:25



石橋断面図 S=1:25



石橋設置断面図 S=1:25

図2-3 石橋構造検討図

(2) 石造物の構造検討

ア 雪見燈籠-1

- ・雪見燈籠-1は、図2-3、2-4の絵図について検討を行った結果、兼六園の雪見燈籠（W1870 × H1870）（写真2-3，図2-5）を参考にした製作品とする。
- ・庭園部会にて、現地で実寸パネル模型にて大きさを比較検討した結果、兼六園よりひと回り小さい W1500 × H1500 とする。（写真2-4）
- ・表面はノミ切ビシャン仕上げとする。



図2-3 雪見燈籠-1『御城御庭絵図』部分
（名古屋市蓬左文庫所蔵）

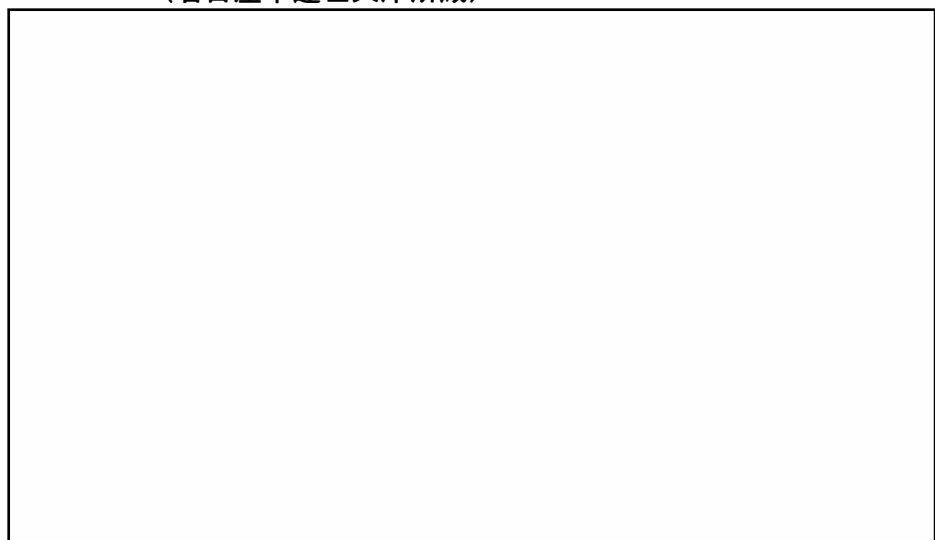
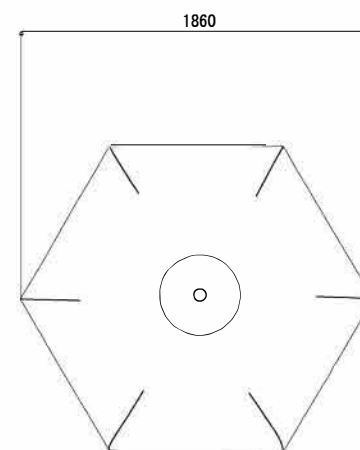


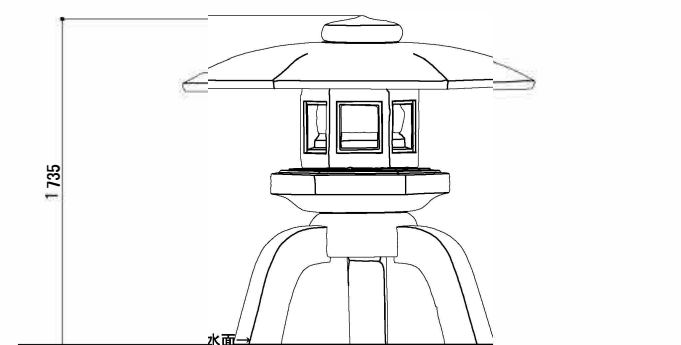
図2-4 雪見燈籠-1『尾二ノ丸御庭之図』部分
（徳川美術館所蔵）



写真2-3 兼六園雪見燈籠



平面図 S = 1 : 40

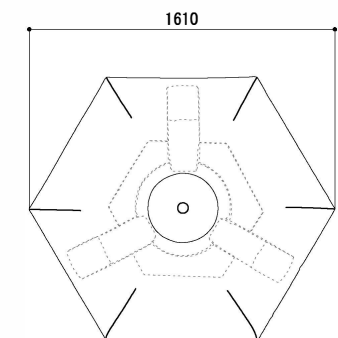


断面図 S = 1 : 40
（兼六園実測図）

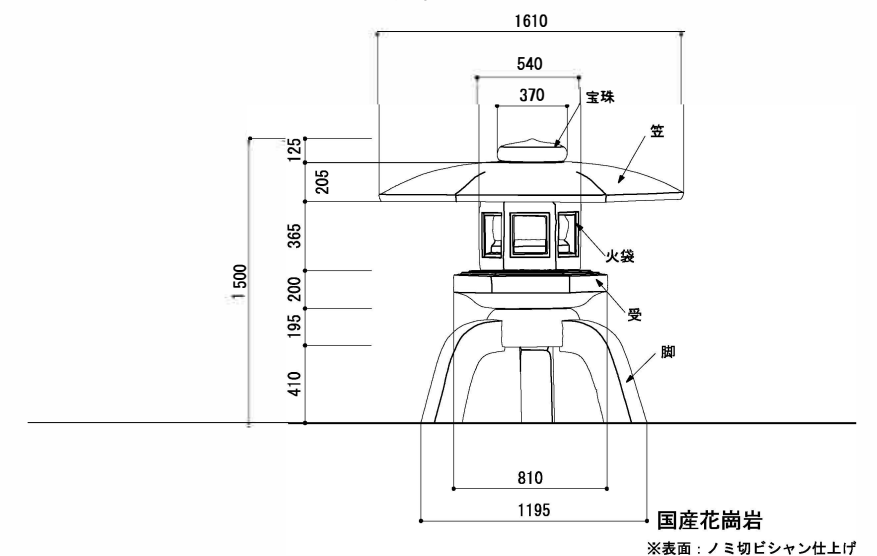
図2-5 兼六園雪見燈籠 実測図



写真2-4 雪見燈籠-1 実寸パネル（W1500 × H1500）配置状況



平面図 S = 1 : 40



断面図 S = 1 : 40
（兼六園実測図 H1500 サイズに縮小 86.5%）

図2-6 雪見燈籠 -1 構造検討図

イ 雪見燈籠—2

- ・雪見燈籠 -2 は、製作品とする。
- ・絵図より、雪見燈籠 -2 の大きさは、雪見燈籠 -1 よりも小さいこと、市場性とを考慮し高さ H=900mm、幅 W=900mm とする。
- ・脚の本数及び形状は絵図の比較検証結果より、4 本一体型とする。
- ・石材について、国産花崗岩で製作する。表面はノミ切ビシャン仕上げとする。

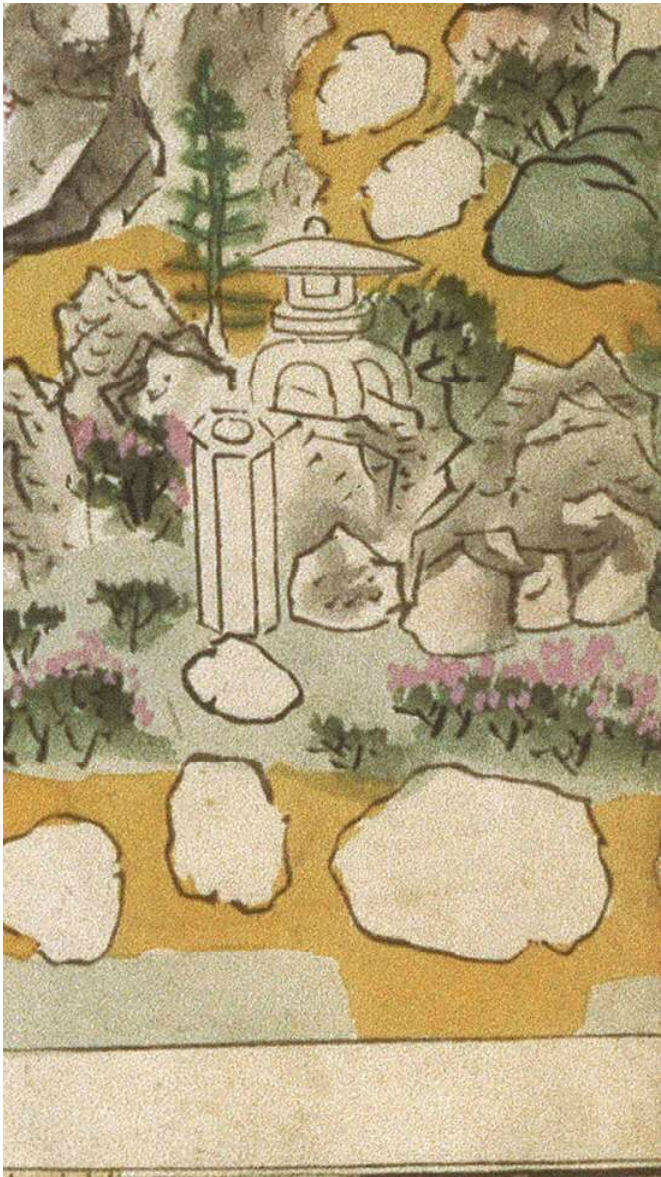


図 2-7 雪見燈籠 -2 『御城御庭絵図』部分
(右 90° 回転)
(名古屋市蓬左文庫所蔵)

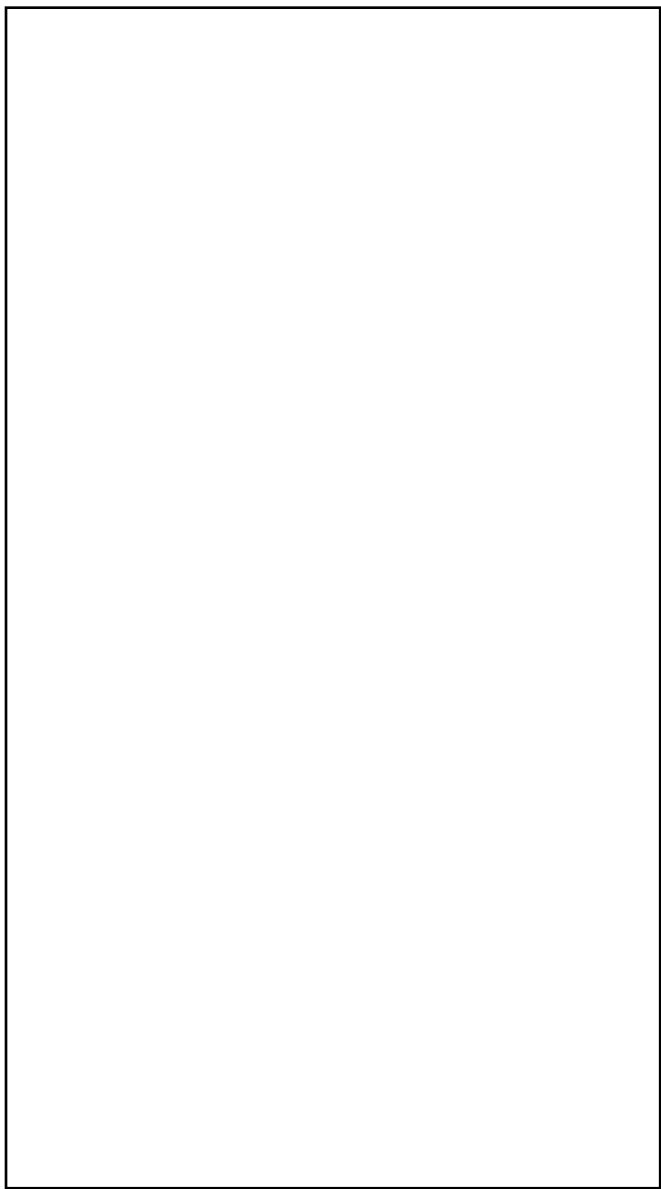


図 2-8 雪見燈籠 -2 『尾二ノ丸御庭之図』
部分 (右 90° 回転)
(徳川美術館所蔵)

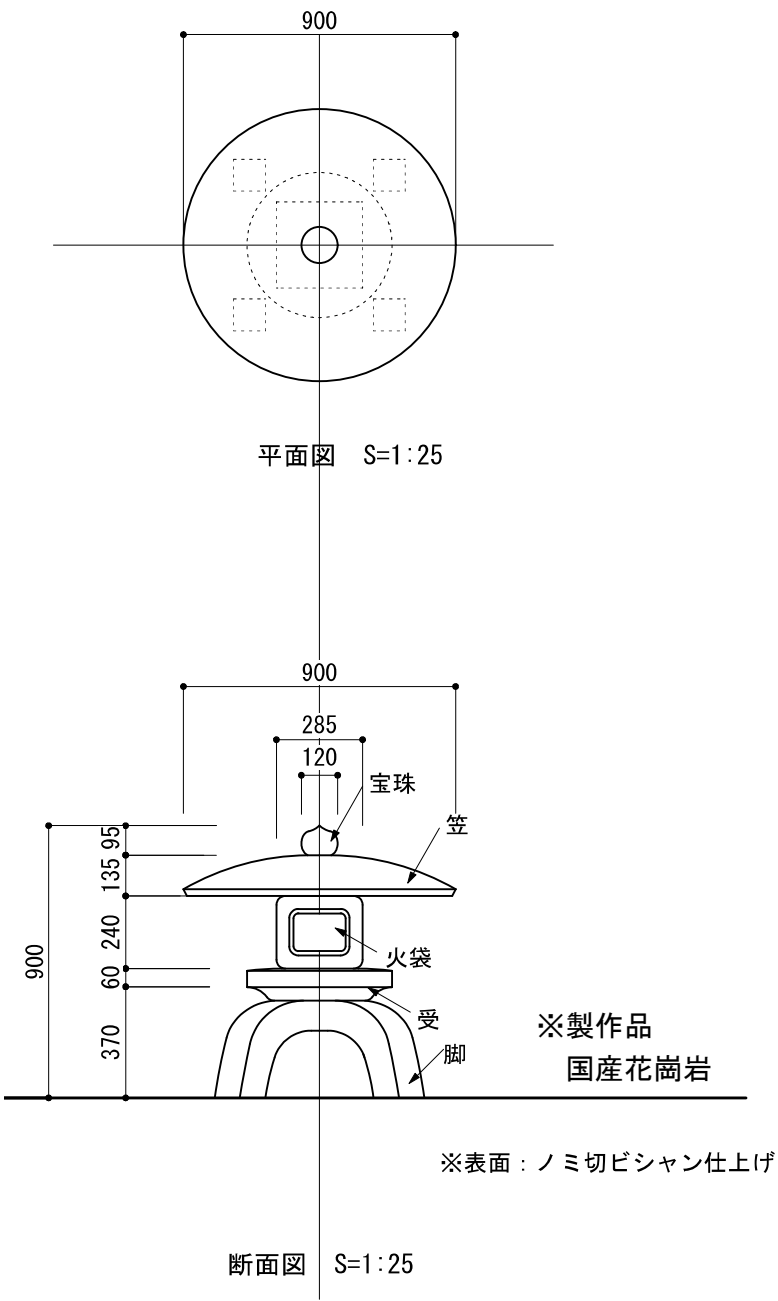


図 2-9 雪見燈籠 -2 構造検討図 (脚 4 本)

ウ 立ち手水鉢

- ・絵図より、立ち手水鉢の高さは雪見燈籠-2と同程度の900mmとする。
- ・立ち手水鉢は製作品とする。
- ・高さH=900mm、1辺200mmの六角型とする。
- ・水鉢の掘り込みは、φ230×H135とし、表面はノミ切りビシャン仕上げとし、各面1分程度のムクリ仕上げとする。
- ・根入れは総深さ600mmとし、設置する地盤の高低差を考慮して、施工時に高さを微調整する。GLから深さ300mmまで加工し、さらに300mmは荒石とする。

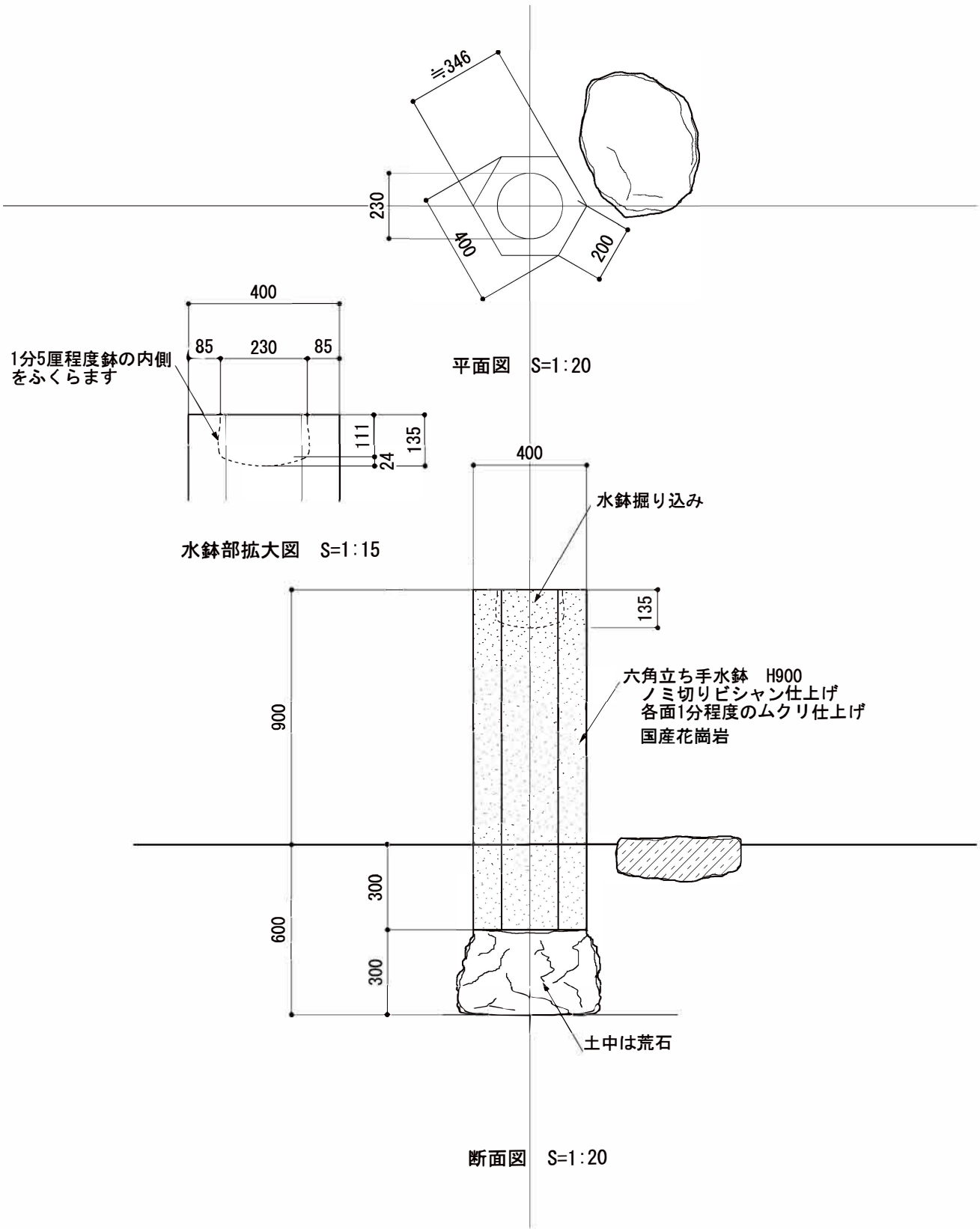


図 2-12 立ち手水鉢構造検討図

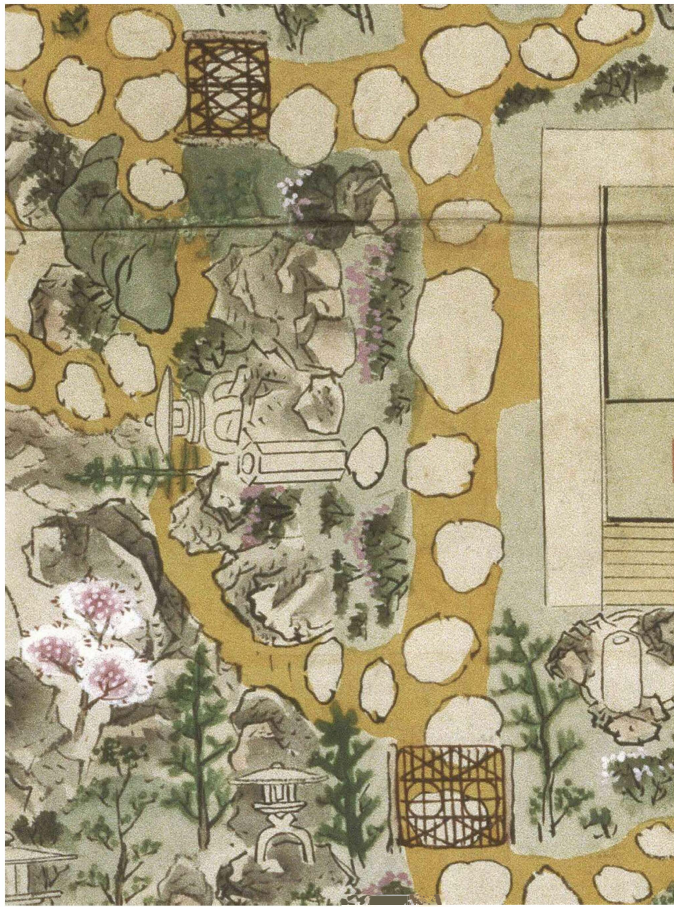


図 2-11 立ち手水鉢『御城御庭絵図』部分
(名古屋市蓬左文庫所蔵)

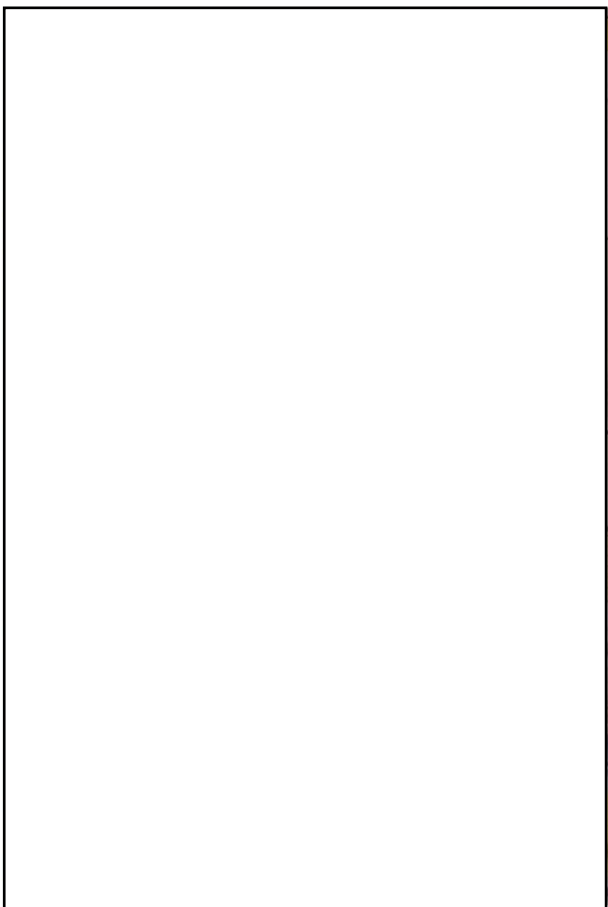


図 2-11 立ち手水鉢『尾二ノ丸御庭之図』
部分 (徳川美術館所蔵)

オ 標柱

- ・標柱は、製作品を設置する。
- ・正四角柱で上面の掘り込みは円形とし、寸法はW240 × D240 × H1200 程度とする。
（根入れは施工時に調整する。）
- ・寸法はW270×D270×H1200とする。表面はノミ切りビシャン仕上げとし、各面1分5厘程度のムクリ仕上げとする。
- ・水鉢の掘り込みは、φ180×H130とし、縁は45mmとする。
- ・側面の文字（東西南北）の彫り込みは薬研彫りとする。
- ・根入れは総深さ600mmとし、施工時に高さを微調整する。GLから深さ300mmまで加工し、さらに300mmは荒石とする。

(イ) 今回検討事項

- ・標柱の側面に掘り込む文字の字体について、絵図では、掘り込みの外形線が描かれており、楷書の「南」と「西」が明確に読み取れる。
くずし字用例辞典（児玉幸多編）に記載されている近世のくずし字と絵図に描かれている文字を比較すると、絵図に描かれている文字はくずし字でないことがわかる。
図2-17, 18の赤線部は近世の「西」と「南」の文字を示す。

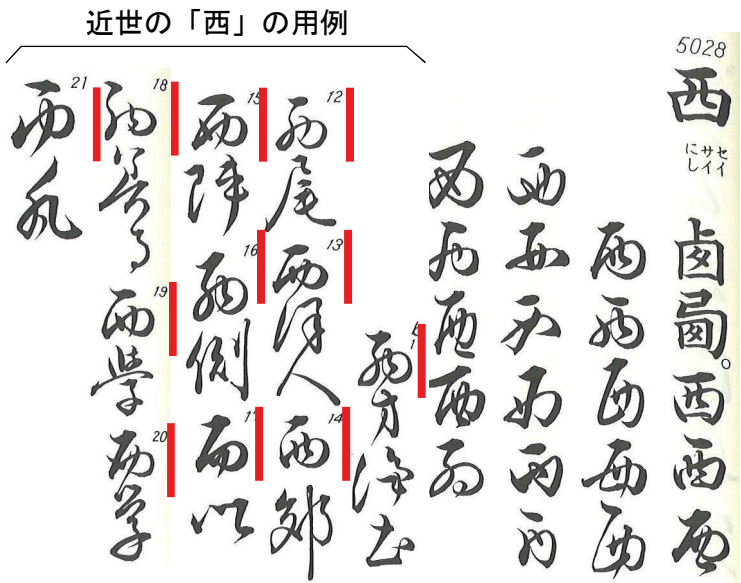
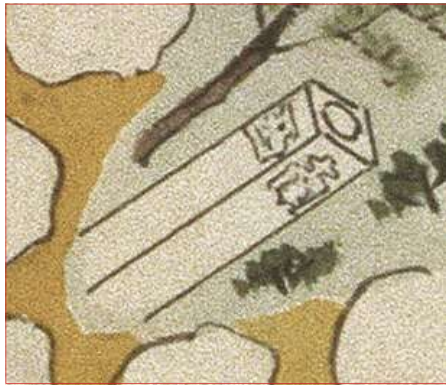


図 2-17 「西」
（くずし字用例辞典 / 児玉幸多編）



図 2-18 「南」
（くずし字用例辞典 / 児玉幸多編）

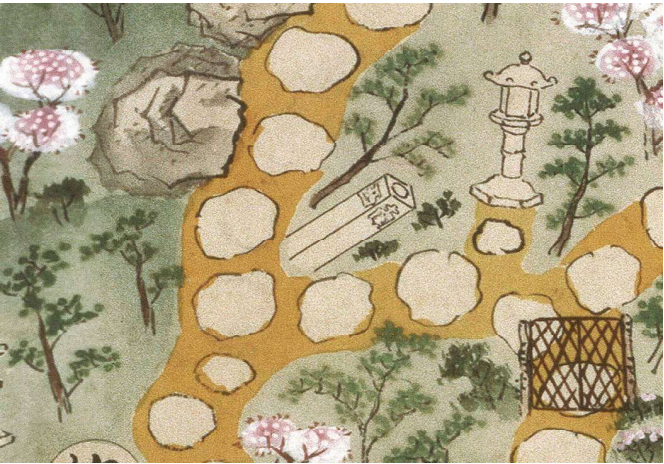


図 2-15 標柱『御城御庭絵図』部分
（名古屋市蓬左文庫所蔵）



図 2-16(徳川美術館所蔵)

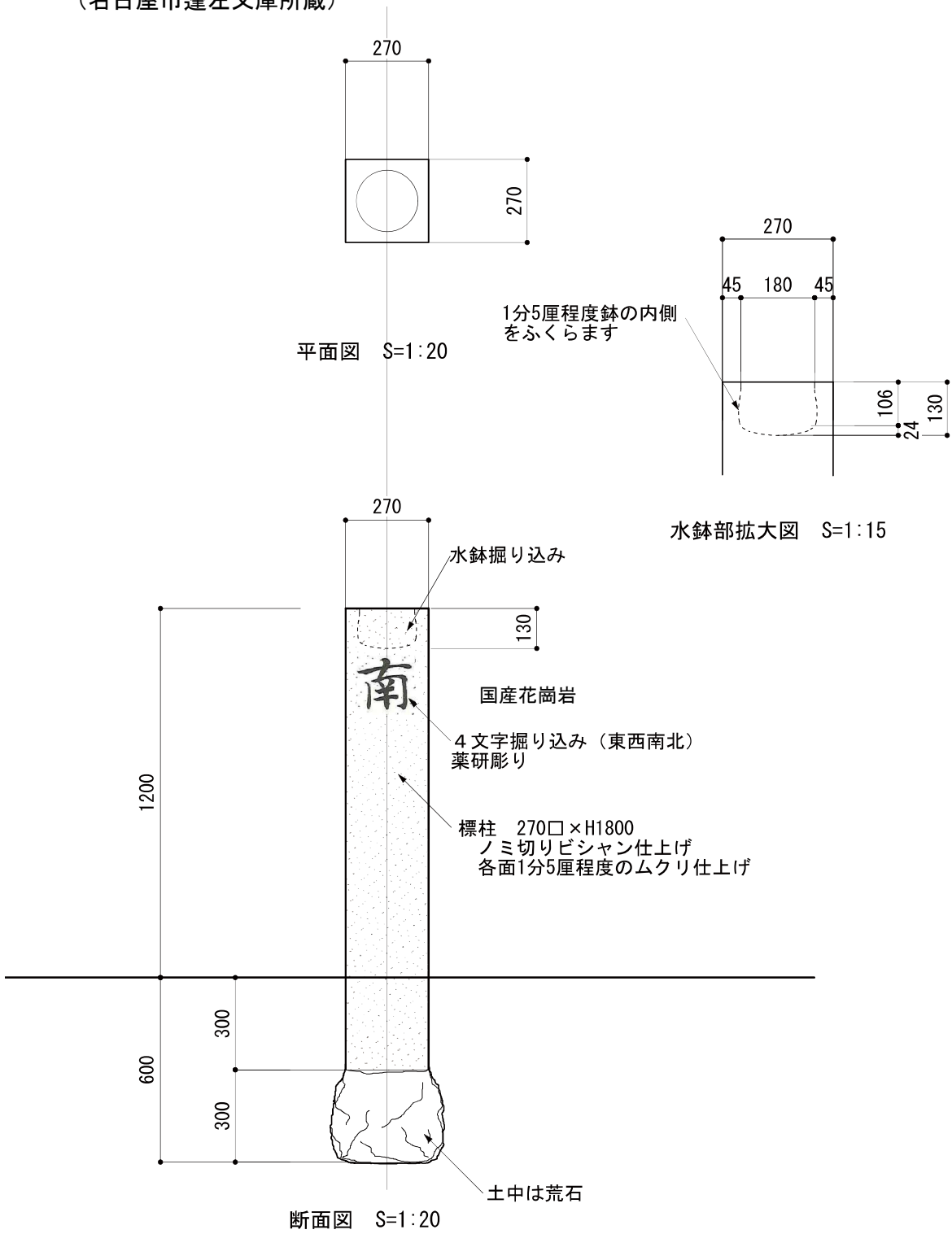
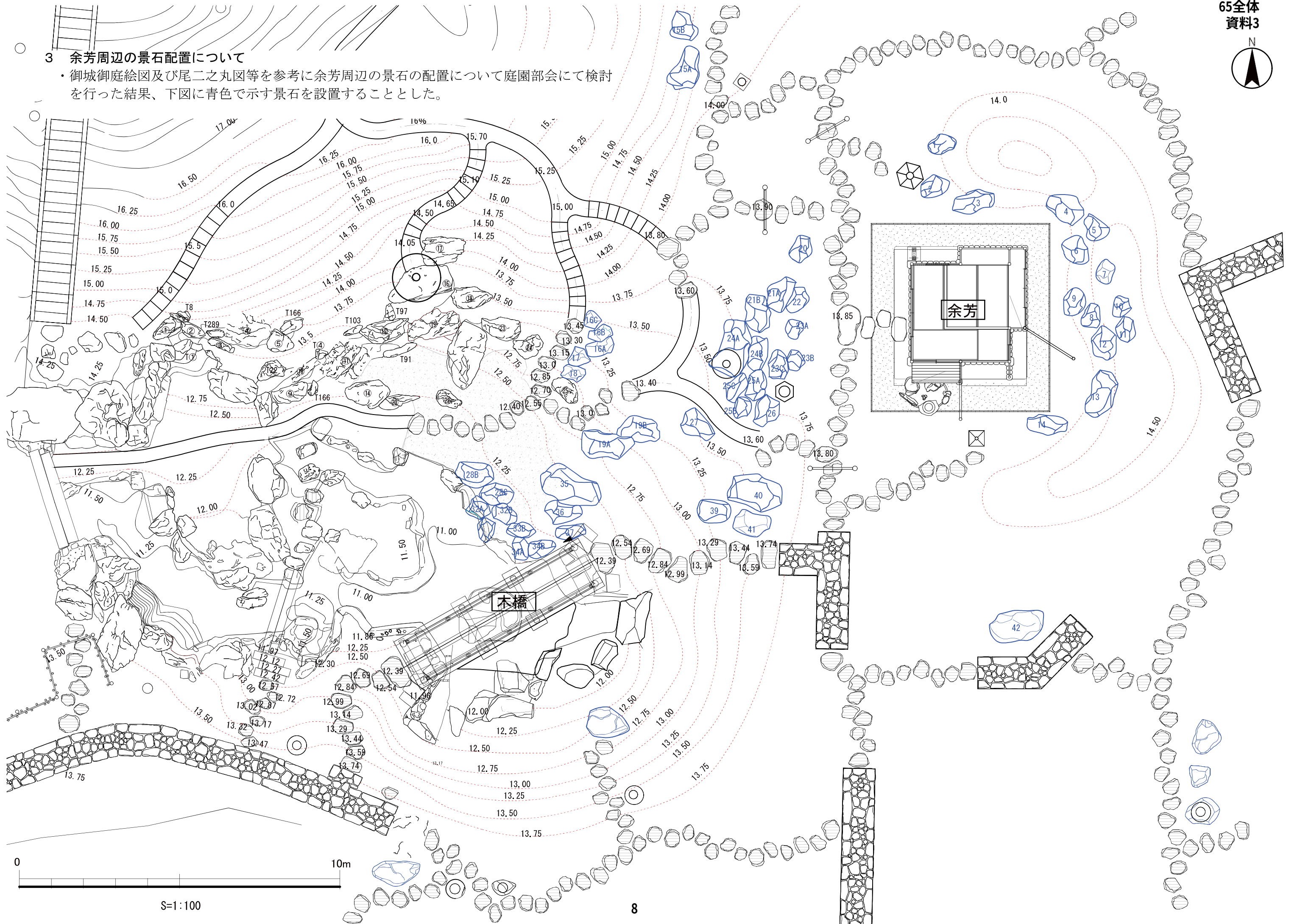


図 2-19 標柱構造検討図



3 余芳周辺の景石配置について

- ・御城御庭絵図及び尾二之丸図等を参考に余芳周辺の景石の配置について庭園部会にて検討を行った結果、下図に青色で示す景石を設置することとした。



4 植栽の配置

(1) 植栽配置の検討

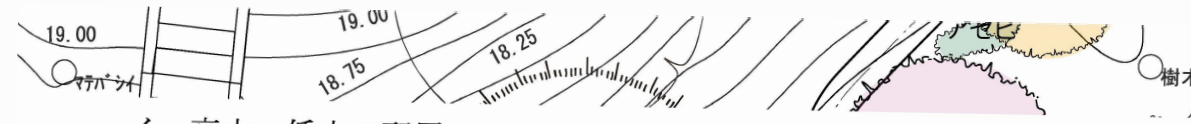
植栽の配置については、下記の条件を考慮し、検討する。

- ・絵図を参考とする。樹種について、『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』で異なる場合、『御城御庭絵図』に描かれている表現を優先する。
- ・建物や飛石等構造物に囲まれた地割ごとに周辺との関係を考慮し、配植を検討する。

ア 大木の配置

- ・絵図に大木として描かれているものは、各区域の中の位置や構造物との関係を考慮し配置する。
- ・大木については、絵図を参考に樹木の生育環境も考慮して配植を検討する。

</									

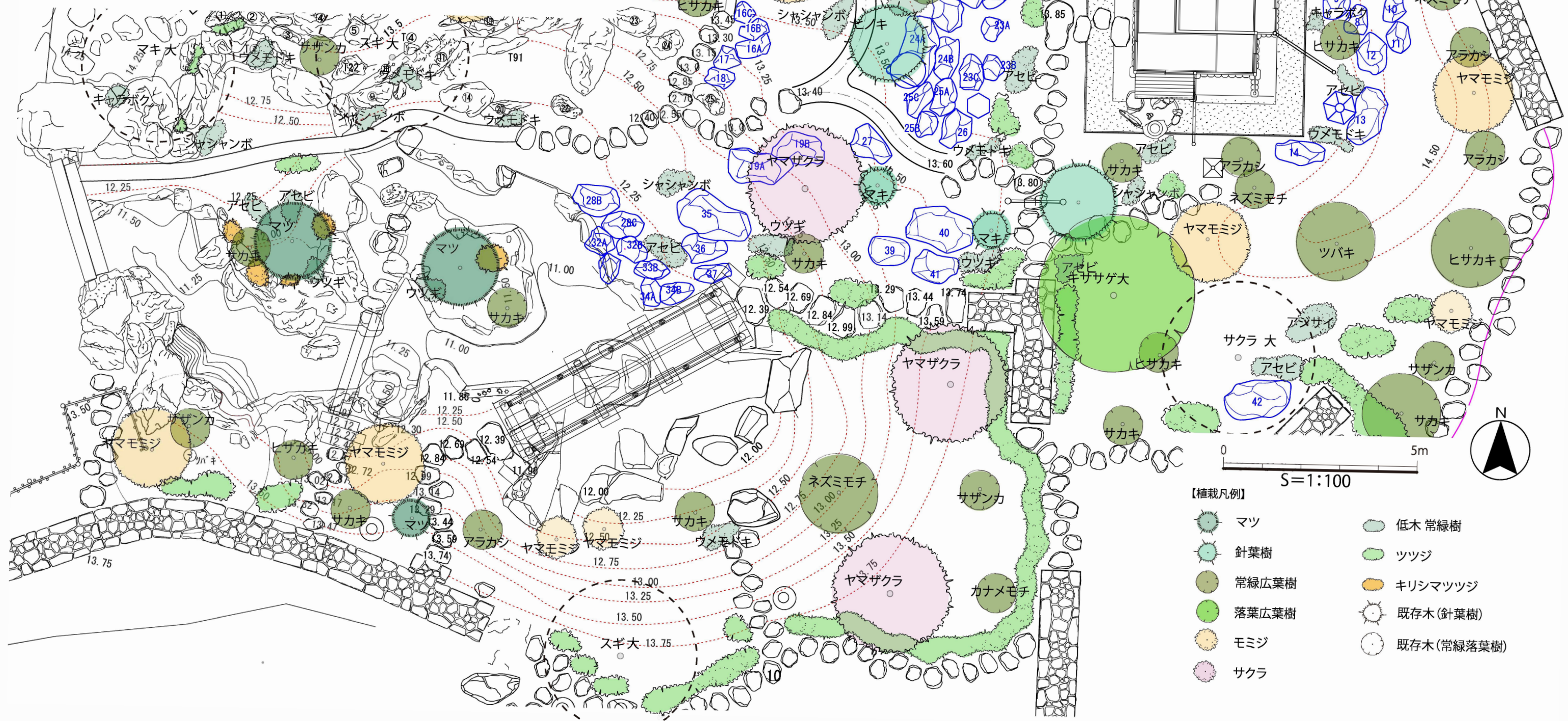


イ 高木・低木の配置

- ・絵図に大木以外の単木として描かれているものは、絵図の通りの本数を配置すると樹冠が密となるため、地割や各区域内の植栽密度を考慮し、また、現況植栽や周辺環境との調和を図り、配植する。
- ・絵図に低木の群植として描かれているものは、各区域の中の位置や構造物との関係を考慮し配置する。

ウ 植栽時の留意点

- ・植栽の土壌改良については、植穴掘削土にバーク堆肥、発酵鶏糞を混合し緩効性化成肥料の施肥を行う。植穴深及び樹木支柱については、地下の遺構に留意し適宜決定する。
- ・遺構に近接する箇所は、遺構保護のため防根シートを敷設する。
- ・植栽時は遺構に配慮して幼木を植栽するものとし、将来的に名勝にふさわしい植栽に育てていく。
- ・植栽にあたっては、庭園部会と調整を図りながら施工を進める。



6 枝折戸

ア 絵図の比較検証

『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』は下図のとおりである。

支柱は概ね同様な描き方をされているが、戸は『御城御庭絵図』には描かれているが『尾二ノ丸御庭之図』には描かれていないものもある。

園路には、余芳周辺に 3 種類の異なる意匠の枝折戸を設置している。二之丸庭園内で御植木屋の枝折戸だけは、扉が 1 枚の片開きで他は両開きである。枝折戸の支柱は、飛石と飛石の間に位置するように描かれている。

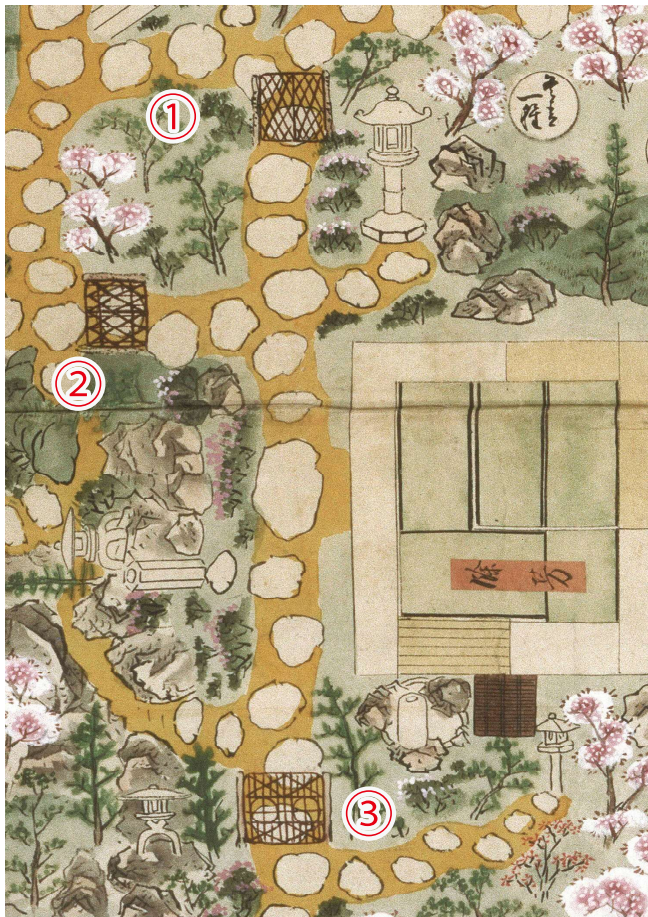


図 6-1 枝折戸『御城御庭絵図』部分
(名古屋市蓬左文庫所蔵)

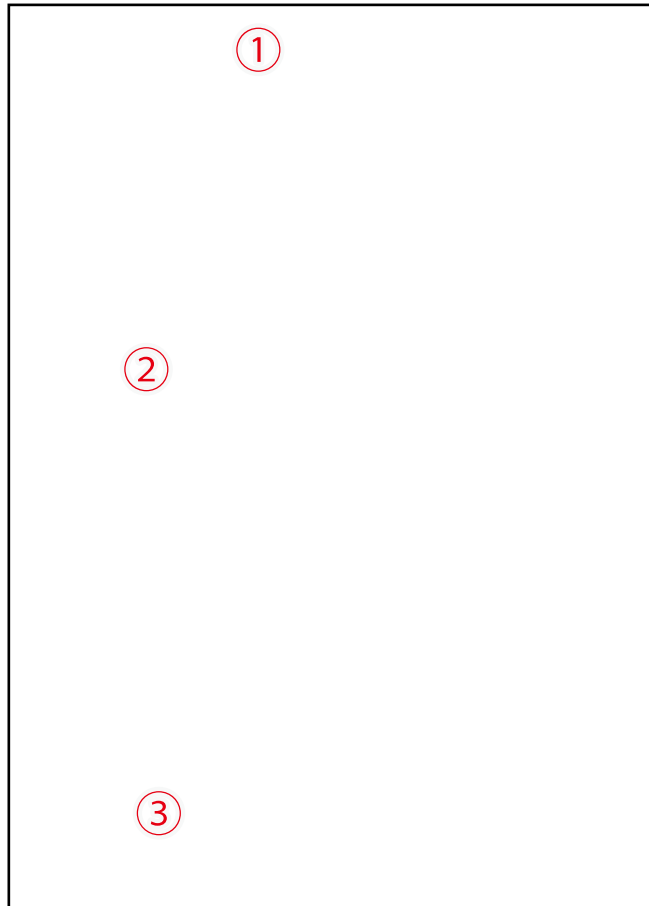


図 6-2 枝折戸『尾二ノ丸御庭之図』部分
(徳川美術館所蔵)

枝折戸と竹扉・竹垣の線の描き方について、竹扉や竹垣の線は、立子が 2 本線で平行に直線で描かれている一方で、枝折戸の線は、1 本の太い線でゆがみ、かすれ、ばらつきが表現され、構造の違いが見て取れる。

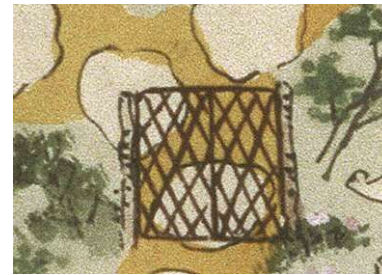
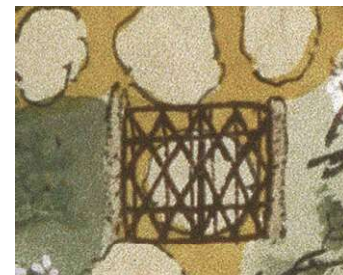


図 6-3 枝折戸 (余芳・北)



(右 90 度回転)
図 6-4 枝折戸 (余芳・西)



図 6-5 枝折戸 (余芳・南)

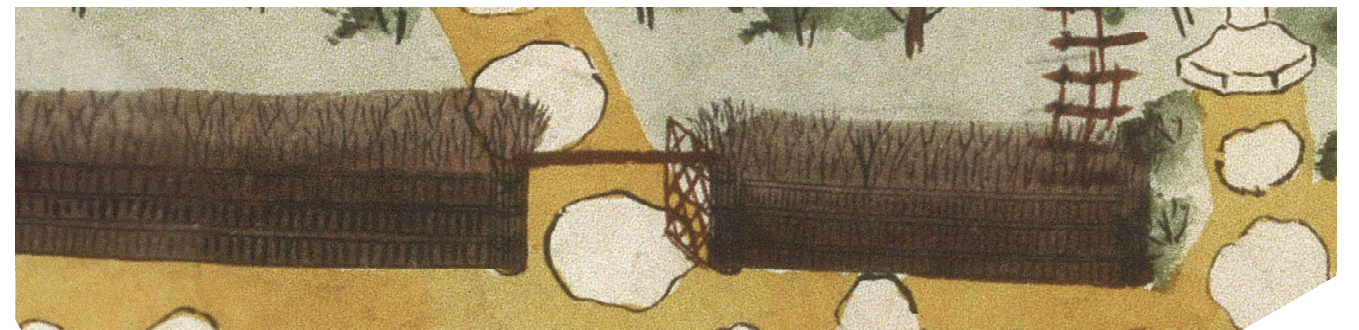


図 6-6 穂垣と枝折戸 (権現山下御席)

図 6-3 ～ 6 枝折戸『御城御庭絵図』部分 (名古屋市蓬左文庫所蔵)

イ 枝折戸の構造検討

- ・意匠については、戸面と支柱が描かれている『御城御庭絵図』を参考とし、支柱位置については、併せて『尾二ノ丸御庭之図』も参考とし、検討する。
- ・絵図より、戸面位置は飛石と飛石の間に配置する。
- ・絵図より、戸は両開きと想定されることから、支柱間距離は120cmと設定する。また、戸に手をかける動作性より、高さは70cm以上と設定する。
- ・柱は檜焼杭 φ 60mmとする。
- ・竹材は、構造材としてマダケの丸竹を、編み付け材としてマダケの割竹を使用する。

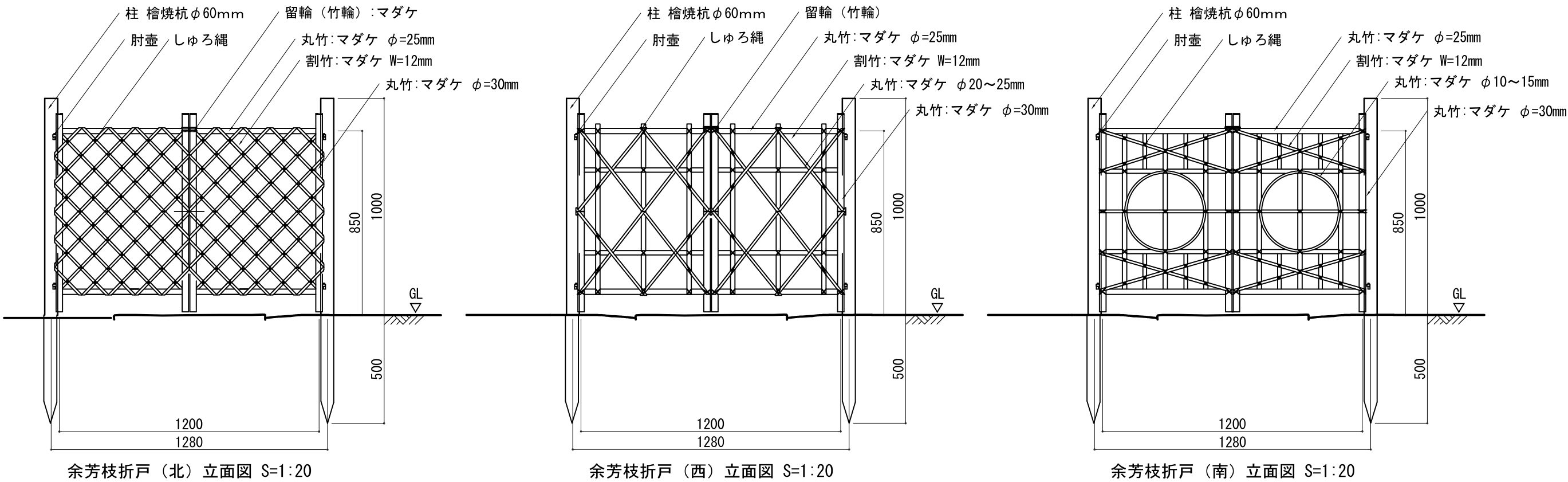
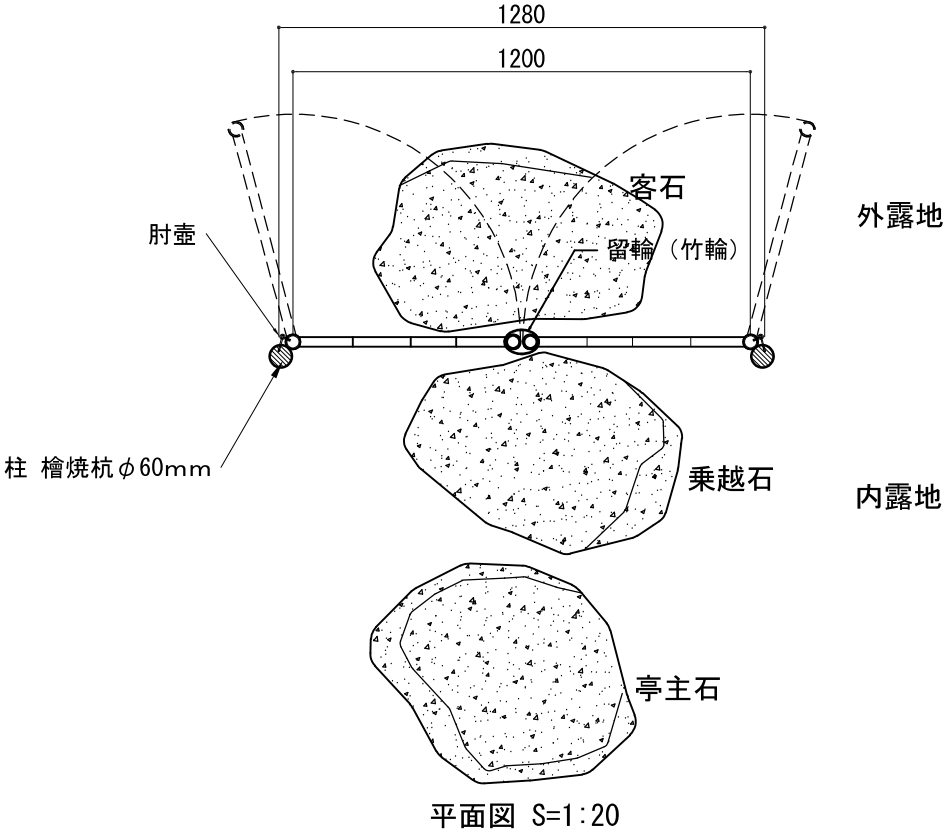


図 6-7 枝折戸構造検討図



7 袖垣

ア 袖垣の構造検討

- ・袖垣は、竹幹を立て子として垣面を構成し、押縁があり玉縁がない建仁寺垣（行）で、構造を検討する。
- ・配置について、東側は、余芳の中央の柱から南東方向に、南側は、余芳の中央の柱から南方向に配置する。
- ・親柱は檜錆丸太φ120内外とし、押縁は半割竹W60内外、立子は割竹W40内外の両面張りとする。また、腐食防止のため立子は差し石の上に設置する。
- ・袖垣の構造について、南側はH1,350×W1,200、東側は、H1,800×W1,800とする。

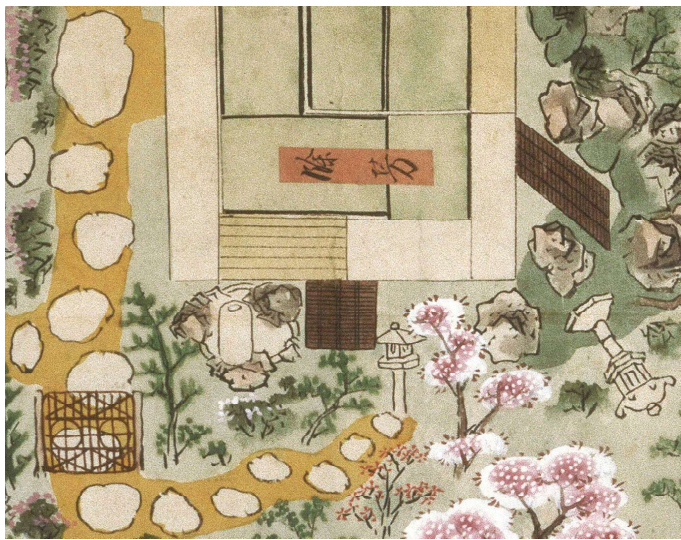


図 7-1 袖垣『御城御庭絵図』部分
（名古屋市蓬左文庫所蔵）

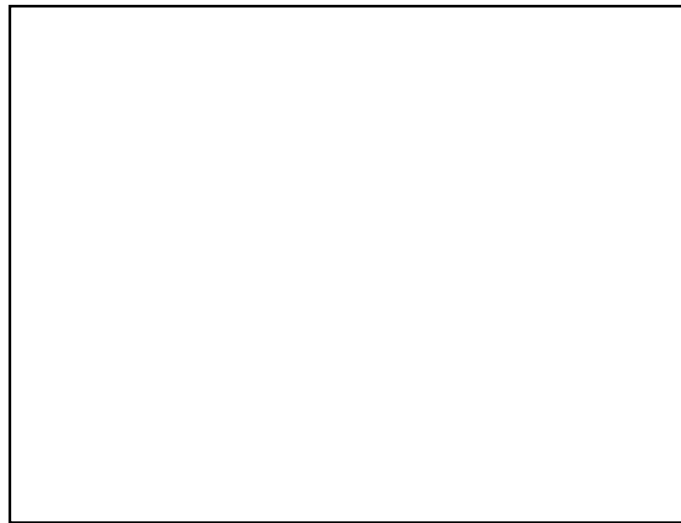


図 7-2 袖垣『尾二ノ丸御庭之図』
部分（徳川美術館所蔵）

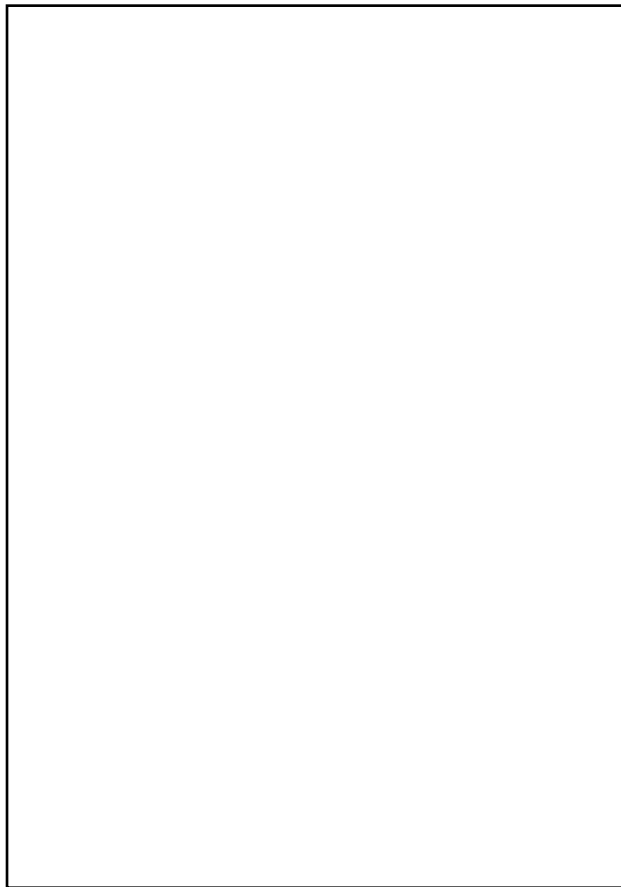


写真 7-1 二之丸御庭の御茶屋
（徳川林政史研究所所蔵）

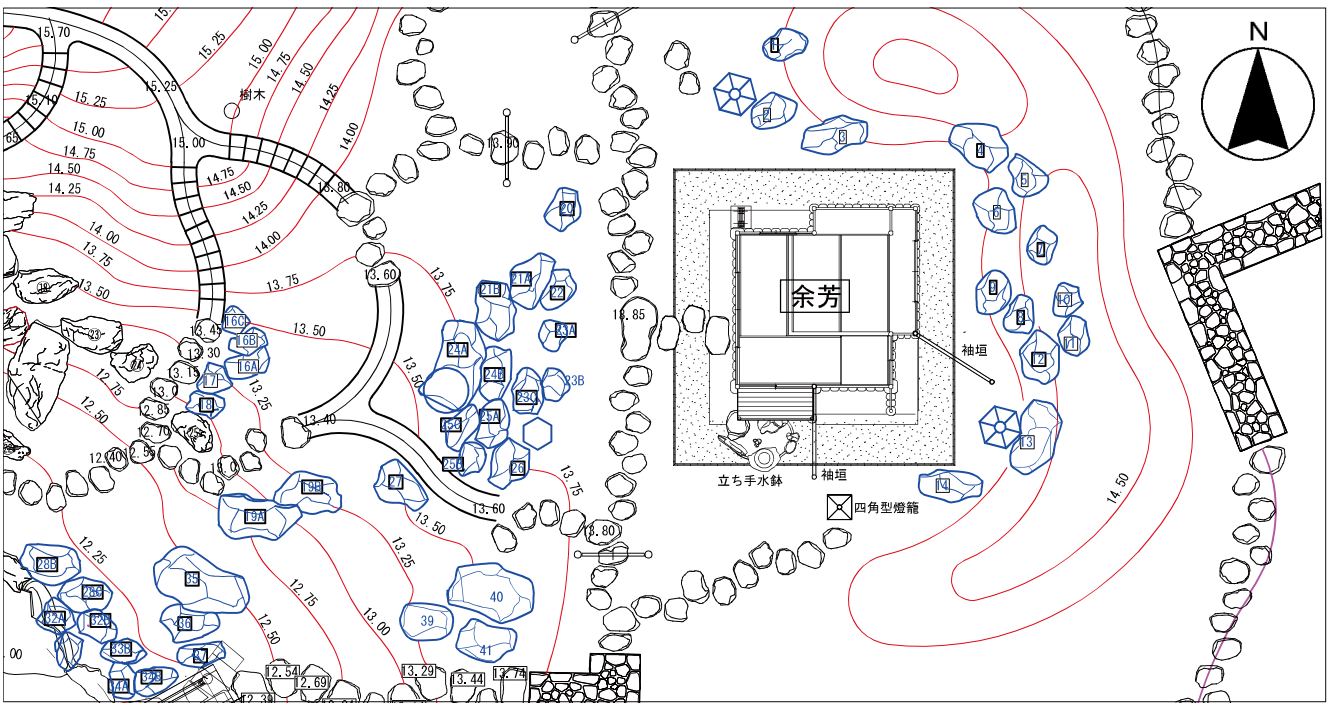
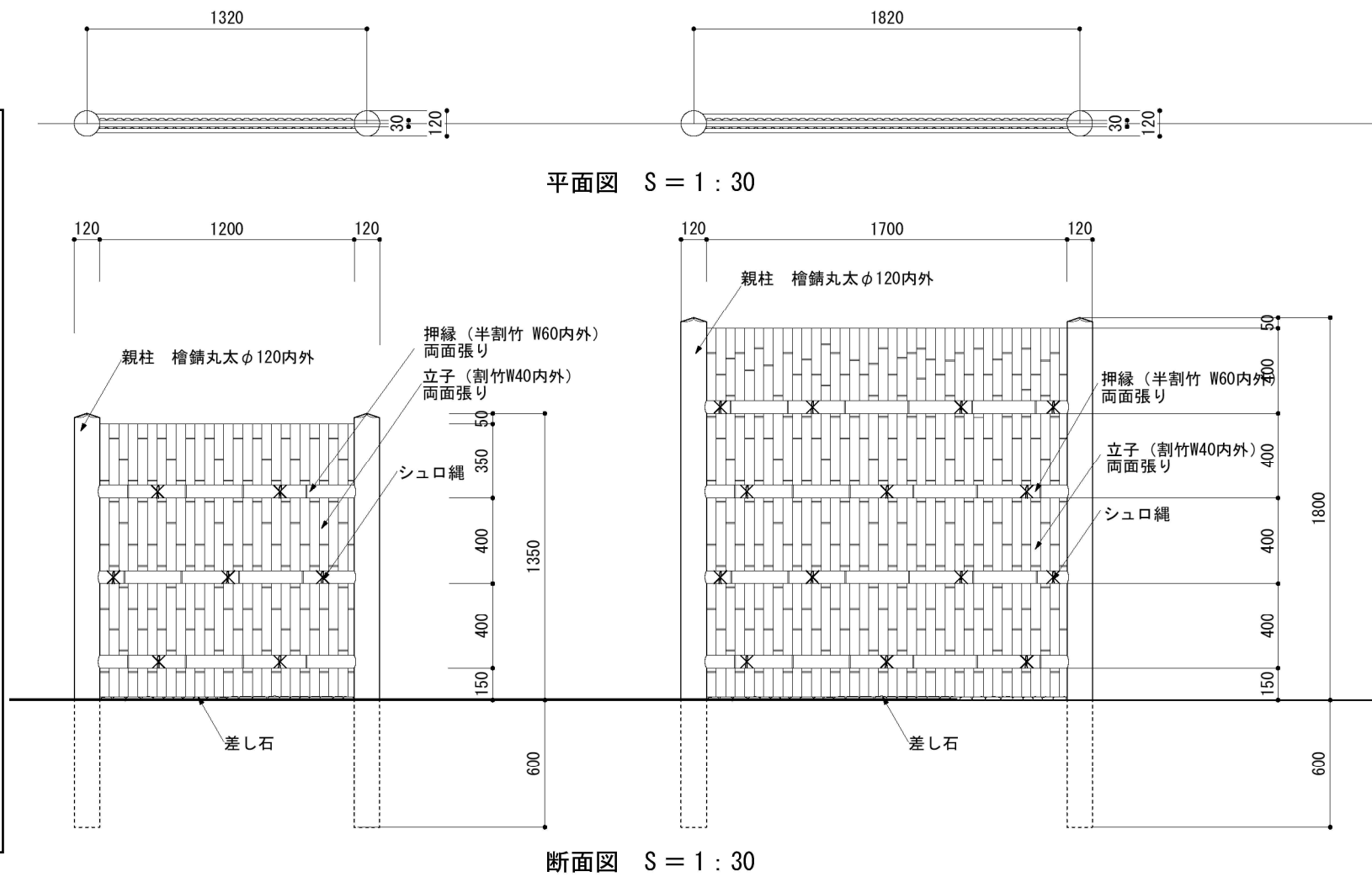


図 7-3 袖垣配置平面図 S = 1 : 150



<余芳南側>

<余芳東側>

図7-4 袖垣構造検討図（南側・東側）

イ 古写真の検証
余芳南側の袖垣について、古写真では不鮮明である。

ウ 袖垣の構造及び配置検討
現地にて模型（H1800×W1800）を設置し、検討した結果、下記の設計条件にて構造及び配置検討を行う。

- (ア) 袖垣（南側）（写真7-3～4）
- ・幅はW=1200mm、1800mmの2案について検討を行う。（写真はW1800）
 - ・絵図より図7-5のA点を起点に南北方向に配置する。
- (イ) 袖垣（東側）（写真7-5～7）
- ・幅は1800mmについて検討を行う。（写真はW1800）
 - ・絵図より図7-5のB点を起点に東西方向に配置する。角度は0度、南に30度～45度で検討する。

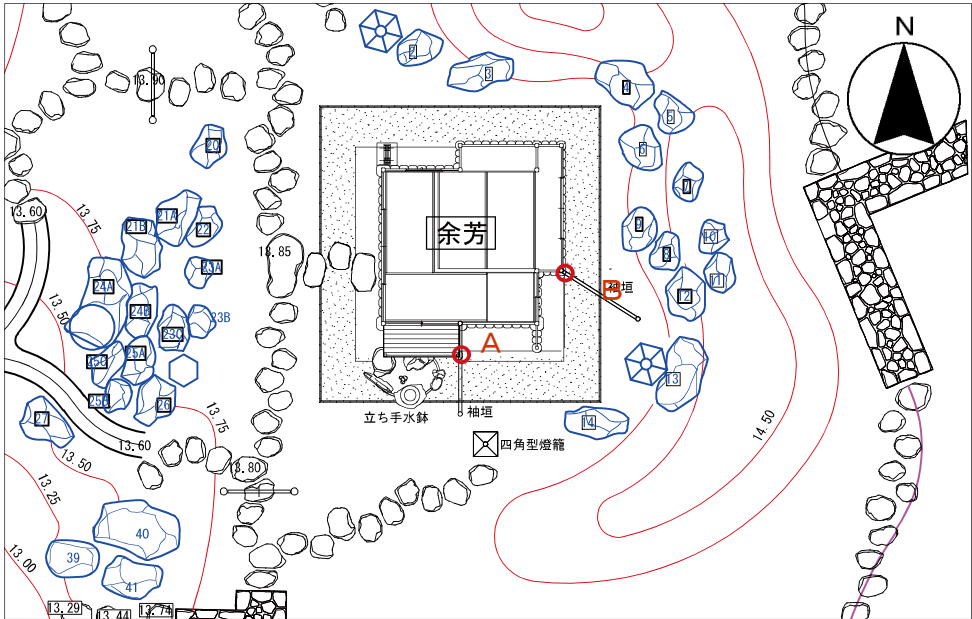


図 7-5袖垣配置平面図 S = 1 : 150



写真7-3 袖垣（南側）実寸模型設置状況
（南側より）



写真7-4 袖垣（南側）実寸模型設置状況
（東側より）



写真7-5 袖垣（東側）実寸模型設置状況（角度0度）
（南側より）



写真7-6 袖垣（東側）実寸模型設置状況（角度0度）
（南東側より）



写真7-7 袖垣（東側）実寸模型設置状況（角度45度）
（南東側より）

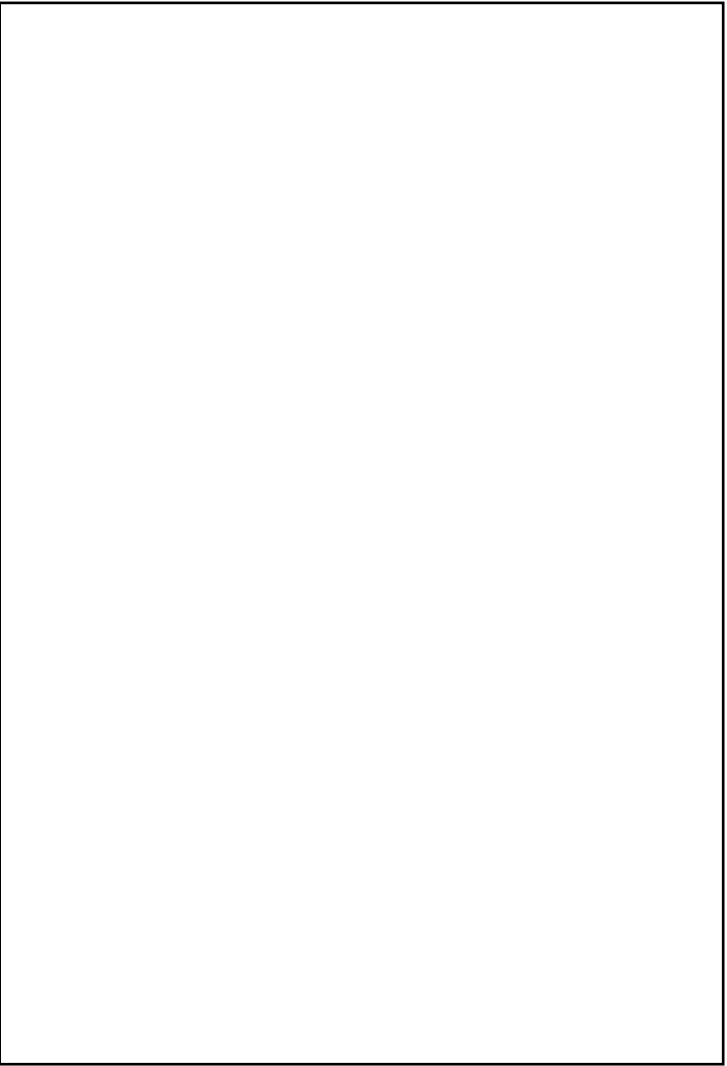
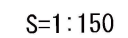


写真 7-2 二之丸御庭の御茶屋
（徳川林政史研究所所蔵）



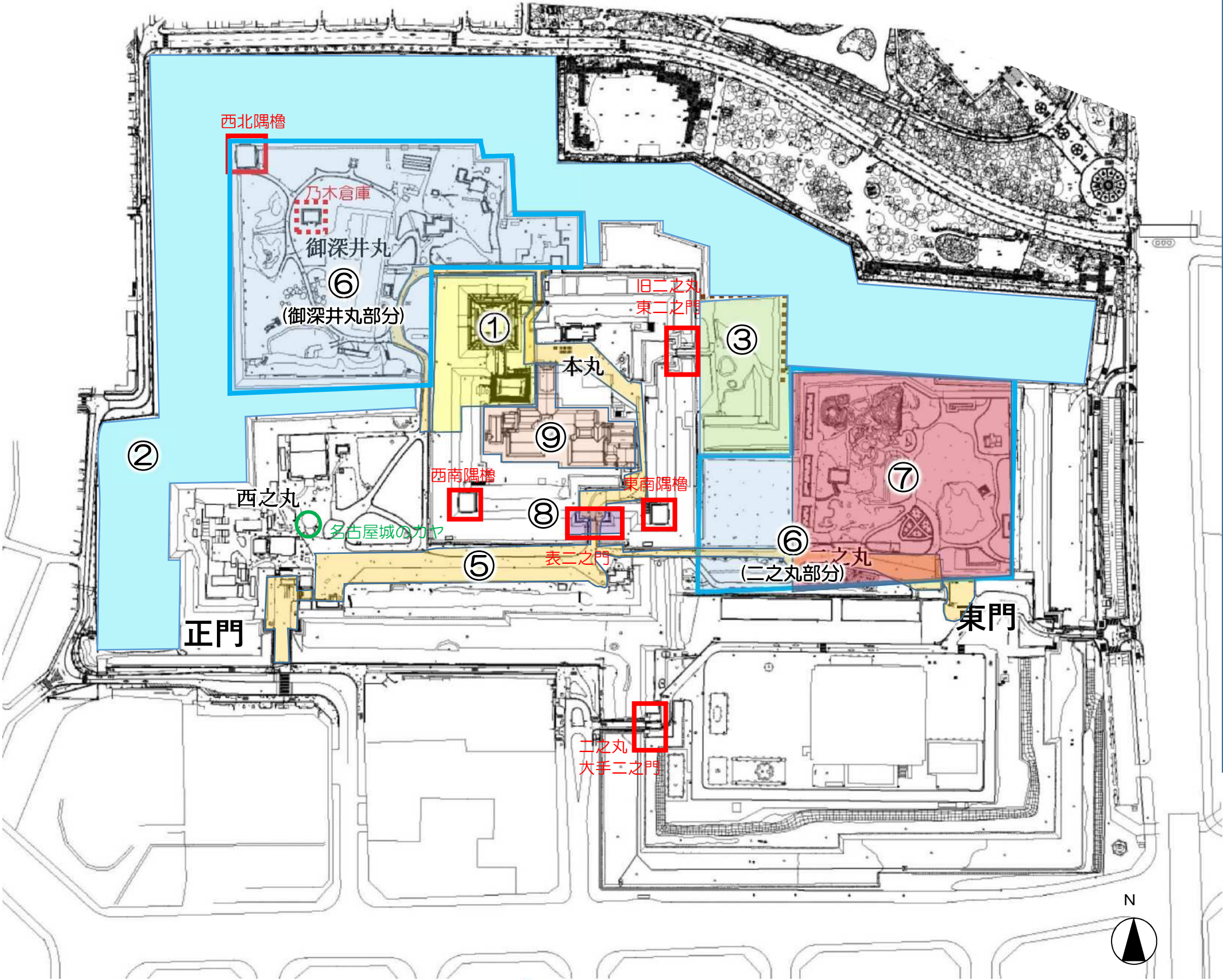
令和 7 年度（2025 年度） 事業予定について（イメージ）

R7. 4. 24 時点

事 項	月	4	5	6	7	8	9	1 0	1 1	1 2	1	2	3	
【天守閣整備事業】（H29（2017）年度～） ○天守台及び周辺石垣の保存対策		◎ 石垣保存対策 （修復及び補修を実施する具体的な範囲や手法について）◎												
【水堀の活用（舟運）】（R 4（2022）年度～） ○船着場設置工事						船着場設置工事								
【本丸搦手馬出周辺石垣の修復】（H14（2002）年度～） ○積み直し工事		積み直し工事												
【植栽管理計画の実施】（R 7（2025）年度～） ○植栽管理計画の実施		◎ 植栽管理計画の実施												
【園路改修計画の策定】（R 5（2023）年度～） ○園路改修工事						園路改修工事								
【園内サイン改修】（R 5（2023）年度～） ○園内サインの作成・改修工事					園内サインの作成 ◎						園内サインの改修工事			
【二之丸庭園の保存整備】（H25（2013）年度～） ○修復整備工事		◎	修復整備工事										◎	
【表二の門等の保存修理】（R 元（2019）年度～） ○表二の門雁木復元検討等		雁木復元検討等												
【本丸御殿長期保全計画の策定】（R 6（2024）年度～） ○長期保全計画策定		長期保全計画策定										◎		
【特別史跡名古屋城跡の石垣保存方針策定】（R 4（2022）年度～） ○石垣保存方針策定		石垣保存方針策定										◎		
【重要文化財建造物等保存活用計画の策定】（R 6 年（2024）度～） ○保存活用計画策定		保存活用計画策定										◎		

※ ◎：計画の策定や現状変更許可の取得に係る内容を全体整備検討会議に付議する想定時期

令和 7 年度予定事業 位置図



予定事業

- ① 天守閣整備事業
- ② 水堀の活用（舟運）
- ③ 本丸搦手馬出周辺石垣の修復
- ④ 植栽管理計画の実施（城内全域）
- ⑤ 園路改修計画の策定
- ⑥ 園内サイン改修
- ⑦ 二之丸庭園の保存整備
- ⑧ 表二の門等の保存修理
- ⑨ 本丸御殿長期保全計画の策定
- ⑩ 特別史跡名古屋城跡の石垣保存方針策定（城内全域）
- ⑪ 重要文化財建造物等保存活用計画の策定（赤線枠・赤点線枠内）

重要文化財 登録有形文化財 天然記念物